

貞丈雜記
弓矢之部
十

ワ3
233
10

80

75

70

65

60

55

50

3
233
10

當 233

伊勢平藏貞丈記

弓矢之部
はのひよ、弓の矢のふくらむる記入をいゆ
弓の既武具に弓の記入を各於て行はるべし

一
弓とたうじとある万葉集の物よ弓執の梓の弓ト
よもて弓執と書いてミドリシヒトモ之武士の弓と
ね弓とあると弓也と弓ハと弓と弓也古弓と
うーー弓と弓也と弓也とトたし普通弓
弓也又弓執の字を用てと弓ト弓と弓と弓と弓多
羅
ロウ故に書く弓成恩す歟
シヤウニジカヨニ
公豆根原と書くと弓多弓と弓天竺の貝多
羅
ロウ葉ハ多の長サ七八寸也弓の長弓と弓多

唐詩鼓吹卷ノ
立皮日休カ圓
戴上人日本ニ
帰ルラ送ヒ詩
月夜紙ツ経
文動ト云句ア
リ其註見多
出摩伽陀國
長ニエテ冬
不凋トアリ
二七尺ト云ヘル
詮出覆ラホ
ツカナシ

ニリ」と多羅村トヤカウトありは既ニテモセ 翻譯
名義集シヤウキシウ云書あり天竺アーリあると書イモ書也ノの
書ト貝多羅樹バイタラト木ハ梭櫛ミコロノ如クナヒ 粒スル
長八九十八尺花、粟アマのサヘ あり人の云一多羅樹アーリト
七仮シナハトニ一仮シナハトハ七天シナハトニ七仮シナハハ四十九尺也
トアヘ七尺半ビテム、見ニテ多羅樹アーリトモ
ラムスハ五合ゴハトテテテキムカハ出家のひ生シナハトシテム
ルトナヒ、即ち、ヨリ事ハ用シナハト
一弓矢アーリト御度トガトトモテ御度トガトハ道具ツブの弓矢アーリト
家シマの弓アーリの道具ツブるを引アヒキモチト御度トガトニモテ

近代純と兵具の方へへ一番純と兵具をすりあつて純のると道具をそなへ心あり個性豊かな徑をそらすとねの後之はまハ徑多アリ

一矢をうけとてうどとも云犬追わの書は公方極
犬に使時は矢めふとほくいほくうどとももくす
ええうてうじしを御教也と下五音通ひうて
ひとそくいきを御のかこと也御教と云はく矢の通名
るきとも老人のまちもと云けていふ時、うちとほくす
とひもとほくいきをすむちよゆくくす
一矢ふうだほくいきを、もくすの本。あみうこやくもくと

之様の本のはざまにあやまへはる書れ雜い
少書きの又て檀のああはす羽の下とぞも也
一矢の根りげんそくとくねり根のことを歎のことく三角
小さくえ書き難いせ書きげんそくとけんさきとや
ト云う一
ノカハサリノカハミテスリニハアラマ
一
西多かすいさぬおひきやのすやと堯雜すが
かべてわらひをいわびるすゆ伝もせてくまもす
一
十六矢よどくちとひさぬせ廿五矢の時ハ手とせカ
内と二れのけてとくちとほてサ五つ一と書
札雜す書き見る是ハ云々わす手のすとくまもす

一矢をゑてギふすすうもがいたのゑすとぞ
右よりゑふ少くもぐく之處原井多賀豐後もハ
ノハ松板事と云り接ぬじ見う
一墓目の木ハ朴の木や桐の木、裏や脇つか用也
一墓目の長サ大方四寸也先きとくらの強度、大ひき
引のよしに木墓目と用ゆる丸このふりさ、長さが四
寸たゞハ長サ四寸也、目によさぎ、所幸もハセ
上方よりやきすすいも、それわれしきれある
ヨシ取立カドナラハフトカニヨリ
バリミテヨン

一曰死^トハ墓目^トリ引目^トモ書^ト負衡^トひきめ^トひ
も^トキ、目^トスル也。目^ト凡^トてひく處^トひきめ^トスル
を異^トテひきめ^ト之^トをそく^トハ寛^ト目^トク^トム^ト古^ト字
石れどもひきめ^ト云^ト謂^ト隨^ト墓目^トリ引目^トモ字^トナ
ト^ト也。墓の字引の字^トハ、^ト也。而^ト子御^トを^トき^ト一經^ト
墓^ト同^ト瓦^ト小^トを^ト墓^トの^トる^ト聲^ト似^ト不^ト取^ト也。名^トつ^トも
云^ト又^ト墓^トの^ト目^トホ^トわ^トと^ト見^トわ^ト墓^ト目^ト、紫^ト庵^ト
生^トみ^トと^ト耐^トる^ト名^トは^ト名^トは^ト、^トも^ト六^ト墓^トま^トす^ト付^トて^ト松
木^ト小^ト落^トと^ト仰^トけ^ト、^トも^トわ^ト也。墓^ト目^ト、先^ト東^ト廢^トを^ト生^トむ
村^トか^ト作^ト、^トも^トす^ト五^トア^ト射^ト向^トの^トぬ^ト底^トつけ

一 墓目を赤うらへ小ぬと赤朱うらへるやで、
石打イタミ

一 級の羽を真羽と云ひ、又羽の事へ。而一小太弓

少名は、大名六鷹の字也。小名就ちの字也。鳥名を附と
以て、矢乃羽と尾と用く。用害紀云。大名羽十四枚
少名羽、十二枚也。毛尾の羽數五枚之又、と云々
と云ハ、海鳥毛尾也。而其羽石打切箭妻更

中馬本馬馬殊羽音白中白す。ふとす。さうす。不ま。石打
石打と六符シクとも小弓。には毛、鷹の尾の名す。士
士もす。毛の尾をしうげて左右レフテルより。鷹の方よ
第一の羽と石打とを分二の羽と大石打とを。第一の
羽是と同し。石打の伍矢と。は羽者と。きく。伍矢
の事。は羽。石打と。は羽。軍陣と
。は羽。石打と。は羽。大將の矢と。は羽。石打と。もく。也
。は文の字を文羽の。もん。の。まく。く。り。そ
。もく。行。よ。よ。ふ。一。く。羽の圖左紀ス

真毛羽ノ夏

黒フ羽ノ事

本間流聞書云

今小鳥羽トテ

アルヲハカラシドテ

下セ大鳥羽トテ

ナニアレハ真毛

羽トテニヤカラシ

リホヨハ黒羽トシ

モトシロ
本白

モトシロ
本黑

モトシロ
黒羽

モトシロ
雪白

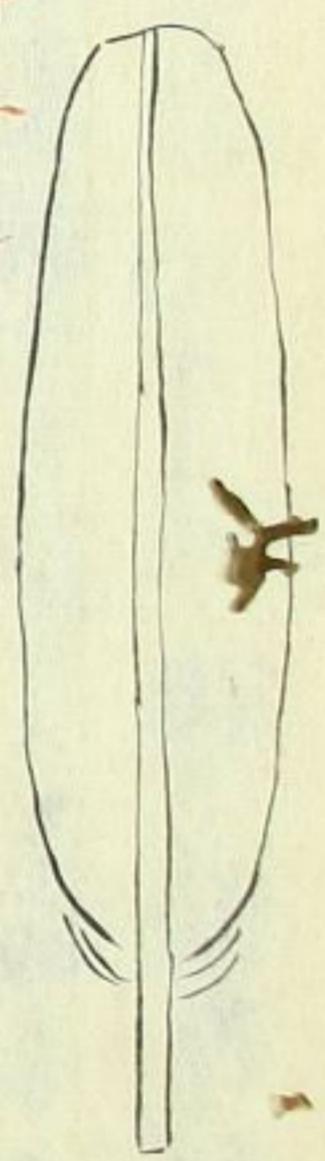
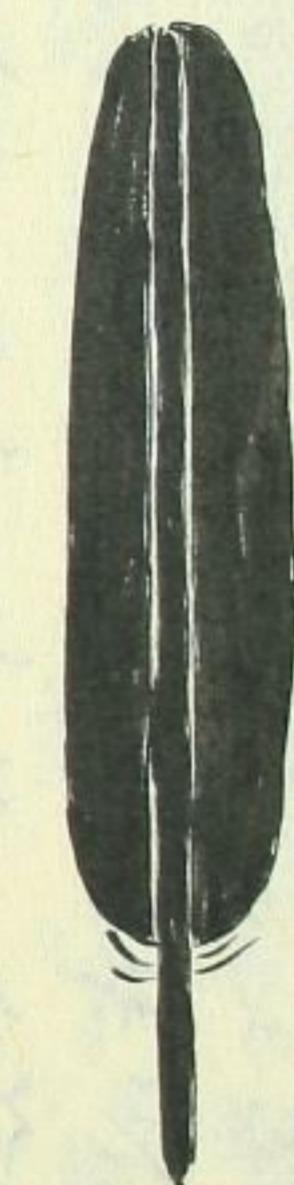
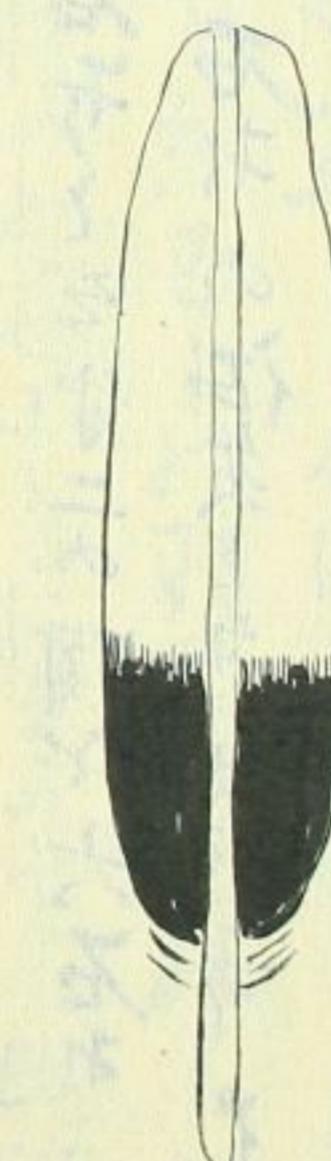
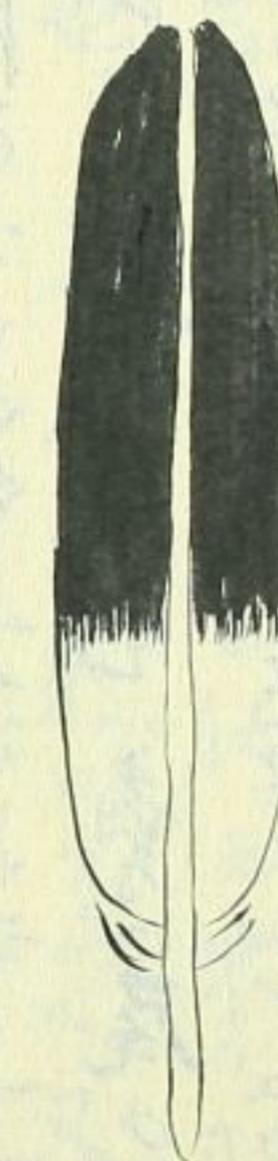
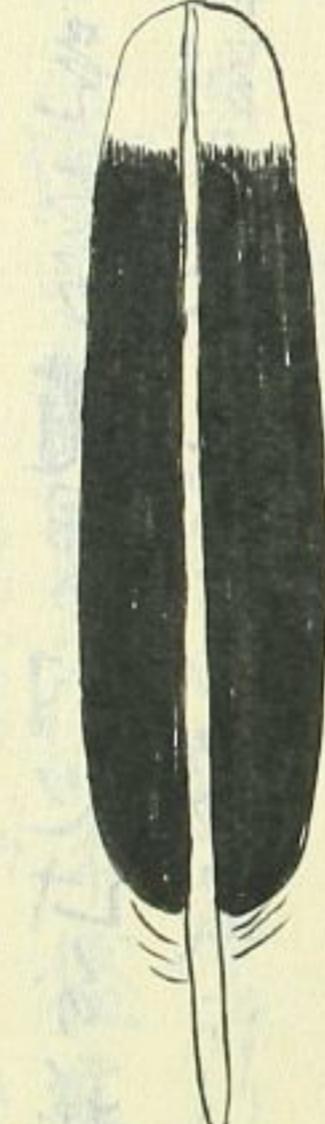
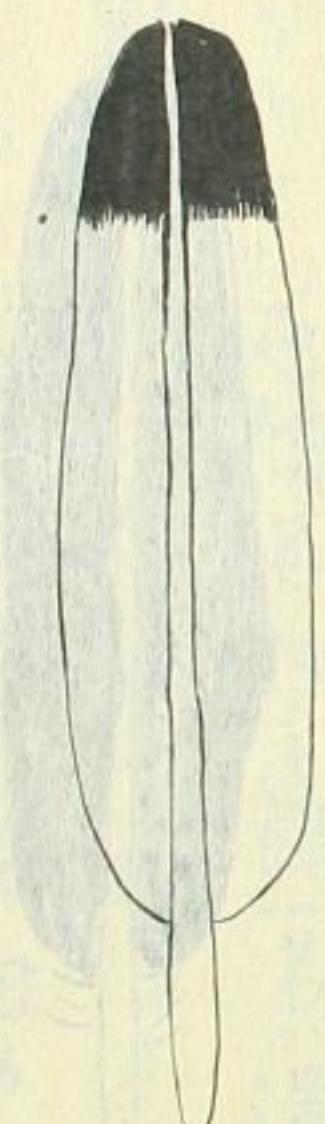
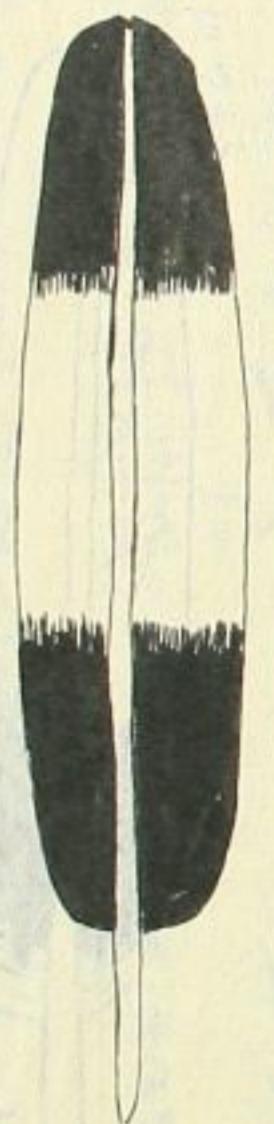
ハナウニ心ナシス、黒キ羽トニ古ヌヤ

ツバシロ
妻白

ツバシロ
妻黑

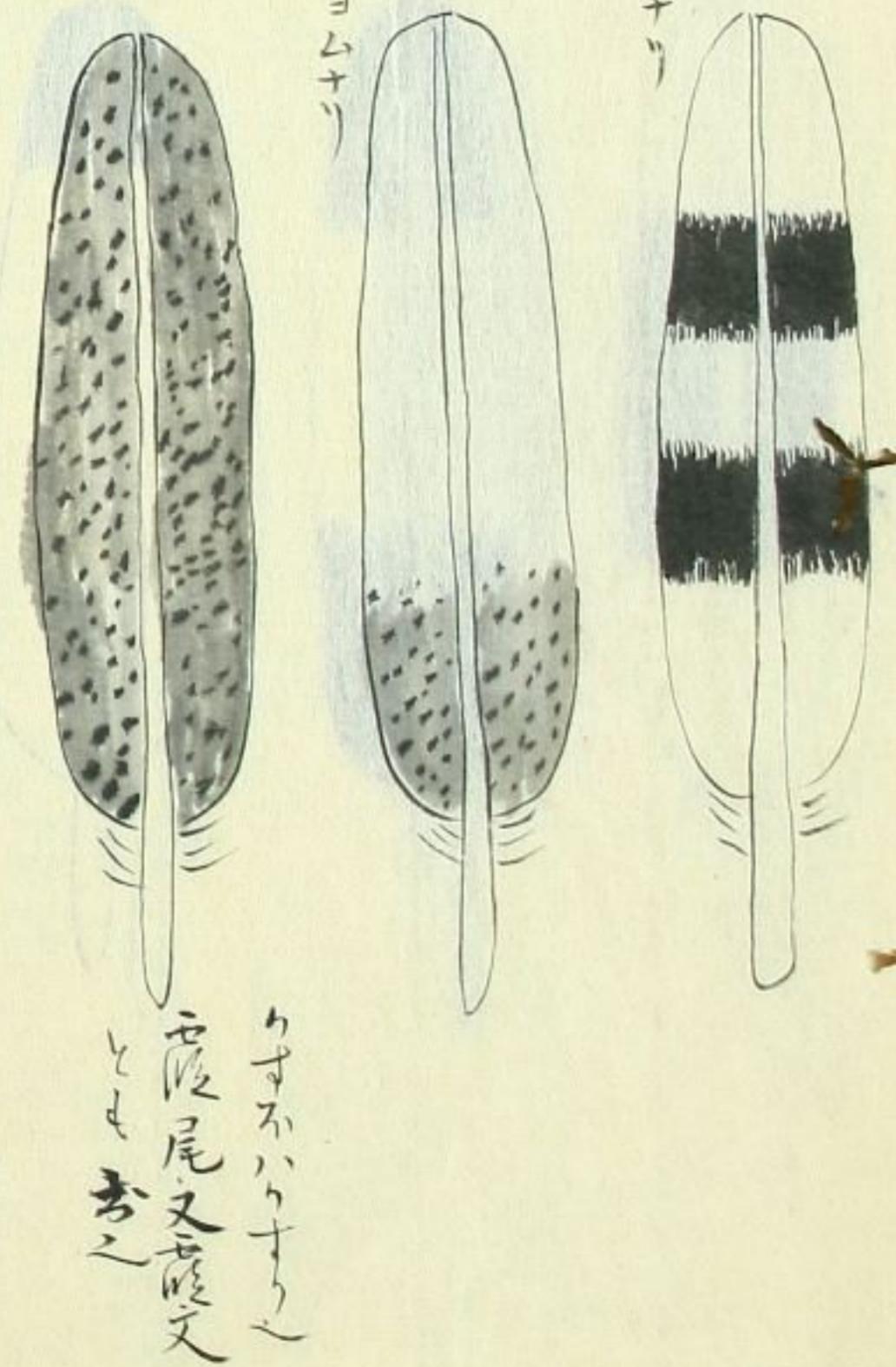
ツバシロ
中白

ツバシロ
中黑



切文

キリヤトヨムナツ



右真羽の弓也是ち方通用の羽也はか極この文
行くも羽に絶別よ一矢音トハ作耳行

又護次
鳥トニ又
ニ方目トモ
云セ又俗
梅首雞
トモ書
セニエニ
人ト云

一うすくうと云ふ事、かくおすめむ也。おすめむ事と云ふの羽柔似
鳥ト文
又護次
ト文書すみふりて、さへおすめむがとひあやまつて、うそく
梅首雞トモ書
文書すみふりて、さへおすめむがとひあやまつて、うそく
ト文書すみふりて、護田為の事之、延年盛襄記、護田
秀尾ト書てうすくうとよしも、倭名抄トスメ、鷦一名澤トスメ、虞郎トスメ、護
田鳥之倭名ハ、於頃賣トスメ、當トスメ、おすめどり、閩東ミテ、
まくうちち又ふうぬ、ゲドヒトミ田の小口トスメ、
て小裏トシヤ、今ふき之五位トコイ、サキ
一
一
根、木牙トコイキツキ、ヒムキの如は矣ハ三十三尺堂
乃通矣、ちと用ひ、之近代の物也。其書、小はゆたる、

一
縄矢ハ遠矢用弓也梅柳箭矢圓木軸のササ羽
遠ノ飛矢トフトキ遠ノユクニフクヲトトリテ行
を矢もくと云根木又近代の物之大、陣中
矢遠矢を射る人をレリ古書小の御もくも
矢矢縄矢からムニ羽を極まで用ひゆけりす
テアヒル心



もあそびし
古書や文庫
代のものと
ゆす

一うすづの羽右の後身の如くま羽の古事記より
今ハ白チ羽と云ふトニハ一色也す

一矢の羽小鳥の羽と云ふあたうの羽の事。角
あたうの角

書くと書ケ也方ハ肅慎國ト、安たの羽多々防ヘ
テナヒテ是玉羽はあれと見ておやセヤ、ヤ作られ
シアタクの羽と肅慎の羽ト、之肅慎と云國トレモ
靺鞨國ト、ひし也

蘇韓國といひし也
軍の時政の初矢入の高

日本ノハの字ナリアリトモリ人也ト之
一至席圓約ハニシ神祇ニシ四目也肘三
一等庚子ニシ、丙辰ノシナリ也、丙子ニシ

記かと云上古の神書トハ陳ちるは勿ニ僅物也之らる
シテ云名りえず後より付て名之は神代の四弓の名
を承びてハ張弓の名を作りたるをトミ後一統の名
実檢の作也と記トナケ余にアリハ左軍弓小ニテシテ
トケ是を以て考之ハ足利有の脚代也またやハ張
弓の名河トニセモジモ世すあらず用モアリ也
三弦一統のあくま御の書ニ、張弓の名ハズえす事
第不齊名めまう白木也モ白木村トニニ五石也くら
あると云名ハズえられども大卒弓蛇形弓羅形弓相傳
里ニテ陰陽弓福元也セ卒弓才のハ張の名ハリ也

又は儀下りて、張弓の名も遠行か、考案あつて
定め一事考そきりしてかのふくをし小ア弓の
事あとも名を考るに某の後めば、流傳と申す所
ありト考案が、是利弓は代わらずよほ南國い
ひうすあり、小考案の後と申すト又が、又張弓
と申す考の弓の形、又すあ弓の蛇の形と申す
ちと申すが、弓の弓の形と申す小弓ト、リ三寸、
五寸と考え、弓頭以下三十六丈又三十六丈弓
さく下弓、弓筋と申す太、筋ナク、と申す筋河
い字しきね考用、一考のれ張弓十張弓などある

さまくの名を仰ぐ。御河、何と。古事記、又アラムの
名ナリキも。ひふア後人の伝言也。作サレラス。
一墓目一腰ナシハ四の事也。是ハ大追越の時也。古
ハ腰ナシテ出立た。既ニ三腰ナシツバニ亦
アモ。既ニ小墓目ツメリ。一腰ナシヘリ。アモ
アセラニラヒミト一本と云。テナリ。サニサニハ三
一之モ泉ナリ。云ハラ。而モ主モ主モ主モ主モ主モ
ぬリ。主モ主モ主モ主モ主モ主モ主モ主モ主モ主モ
アモ。又アモ。主モ主モ主モ主モ主モ主モ主モ主モ
一むじヨムラヒミト。村利ヒミト。古量ナミカハラモジ。

隙近通ノハキナの中。ナキナ。ナキナ。通す三石ノ
一内ナラモズ。通ノ。キナ。ナキナ。ナキナ。中
キナ。ナキナ。ナキナ。ナキナ。ナキナ。ナキナ。ナキナ。ナ
乃隙。ナキナ。ナキナ。ナキナ。ナキナ。ナキナ。ナキナ。ナキナ。ナ
想。ナキナ。ナキナ。ナキナ。ナキナ。ナキナ。ナキナ。ナキナ。ナ
「口傳ニテ。豊。ナキナ。ナキナ。ナキナ。ナキナ。ナキナ。ナキナ。ナ
ナキナ。ナキナ。ナキナ。ナキナ。ナキナ。ナキナ。ナキナ。ナ
ナキナ。ナキナ。ナキナ。ナキナ。ナキナ。ナキナ。ナキナ。ナ

おまけに、ゆき若、白して玉あわやせうつすとさかねて
三木翁といふが、翁の字は付き已て老の字をもつて
上三木と號する。翁の号は、翁の字を表すものであつて、
翁の字を表すものであつて、翁の字を表すものであつて、

一白木の弓と矢、馬車うや
一白木の弓と矢、馬車うや

かの君へあくまでもおまかせを承り、お詫び申す。白木村
一白木村小ぬま強魚(こすめまきう)、白強魚(こじやく)
すとよぬまちと用事多す、白木と用事不白木村(こまき
と、累矣やれよ豆丸の足也。旧記小豆丸(ニリタマリ)、
的虫屋(セキムヤ)。

波の音とすきをあくまで一見いみほのりも、うるや
うすくけかくせんじらうと缺くして後はまくまーいと
石ノ務キリコ
地ナトスナ
だノチニ
ワリ出来テ
ドロ出之
後はまーうるやかにあへて、缺くて時砥石とあく
どき少しへ年を下すゆを仰めうて平と重レバヒシヤウ
レバヒシヤウ

き墨を二三度入ぬまーと記して、ねえうそろひ
うるやけめくわうのくらむ様よ若少て缺くす
缺くする財産をまつ名を生する者のひよもきうる
き生てまこと衣細き名を小につけたやくうかくは
少しうひきまーと落めをねたのじーと至る

本音をしめ、こゑ方と右地のうと横田と右め
右地とすき、あはれよひてもらうとゆふ、とおれま
一木の音の空寂のゆゑあがりとくは無事あるが、
アドレヌスの三木と京とさうとくはせん不審にぞう葉、
九度又七をまく由ハ強ての風、四足弓トニ
ニ六脚の三木と京と、とくハ天のさ八窓、とくみま
はれをせせ、九曜七曜の星、とくに又仁田右馬助の
絵、とくやう上六、とくやうトハニテ、和音とぞうと
アモのひにあはれ、序文とすやう紙と書てぞうと
、とくを在處の緋字とぞうとばを率てうそと十章を

て不恥せぬ、あるまじき、唯人トおこそキモケテ
大將のわらうるを仰ぐるゝ、唯人ハやくすがめ也、
アシトテ素面すら、ハラムもすまく、左近と
左近くぬす白く、ミツキをえみ素面のアハ、左近と此モテ
シテ、左近と大河の名の石に、ナニシテモテ
左近と、左近と足くぬるく、ナモアヒト、セモトモアボ
左近も白く、左近も力も、左近とハメ、ナモアヒト、左近
左近も、クヒト、是にばら、アヒト、ゼキ、アヒト、左近
ナモニのあとも、左近とリトトカモモアヒト、左近
左近と、アヒト、ナモアヒト、ナモアヒト、左近
ナモアヒト、セモテ、ナモアヒト、ナモアヒト、左近

セキ
ツリ

之をのせまほのる所をすこと一又古伊勢
國閑シテ不作作シテ出シテ弦シテ閑弦シテひねシテ下シテよ
不作作シテ出シテ弦シテ板弦シテひた事シテ小富教具シテ
の紀一系兼良公の尺素シズシロ往来シラスふとく又シテ是シテあ
名翁シテあれまの名シテて之シテ閑シテ不作作シテ
弦シテ白弦シテ河シテせキシテ弦シテ河シテ板弦シテえ
しもむかくありシテせキシテ弦シテのせキシテと云シテ河シテ弦シテこ
う極シテ閑シテ不シテ名シテと云シテよ、行シテす弦シテとせキシテ
河シテせキシテ安シテくひシテ弦シテ経シテ魚シテをそもすめシテど
と、モシテあ處シテはれてシテうちシテ在シテうすシテゆめシテ

あ處シテとせキシテせきシテ也シテ樂弦シテと書シテ樂字シテ、本シテ
と云シテ又國弦シテ書シテハクの國シテと云シテ不シテ出シテ弦シテと之シテ
一シテもあシテのシテらシテと云シテハシテ除シテりシテとシテいシテ、けづり
一シテもあシテのシテらシテと云シテハシテ除シテりシテとシテいシテ、けづり
のシテらシテと進シテゆシテりシテおシテう握シテ記シテ、すシテもあシテのシテらシテ
あシテちシテのシテとシテ五シテ首シテ、教シテはシテはシテ國シテ不シテ、相シテはシテ大シテ首シテ
より公方シテ五シテ長シテもと下シテつシテ十シテ丈シテ、もと下シテゆシテ、
別シテよこシテ、ねシテあシテ、
一シテらシテの長シテさシテくシテとシテ、大シテ双シテ紙シテ、秋シテがシテ七シテ
又シテ等シテ、
卷シテ二シテ

ヲモス等シテ失シテニ尺シテトマウ分シテト定シテワケシテハまシテス

卷之三

當年五
束る
未清々不
又云高
ホコシテシテ
其ノス指ラツ
セ天ニ守タリ
人ノ好トシセミ

すと定めてらとしきもくでゆひすてゐのすのど
やうゆみじり是とあがま
ユルヤカニラタクヨクニラカスカジタク
本ハ七尺五十但不ニ六
人の好いりせき
あひ今トヤヒト
のホリイオトミキモト守トモミ
あひのひトリ今トゆひのひまトモキナシト松
一弓みかキト定マ射手方ゆき書、云らのみキトのみ
東宋右の乳のトヨヒモキトモキナシトモミ
てモトモくモトモキトモキナシトモミ
モ人よよりらのモキミークモキシモ
一矢にか事の事附方す書ニテ矢内、長身の事鞭
矢カノナキ又モ

一 箕はこゝへとさよ一セギるゝ色白也

一 のひ箕もや箕もこうやそひのひも

一 やすすと云ハ竹のやうもすと一

一 よもすにまもすやすちを意の本と筆を以

一 有ふすと個ふーの不キゼすよの不キ也

一 五キモト、別の竹子もすと竹子もすと是を

一 竹のすの不キ竹子もすと是を

一 めもす、席の角もすと此急め、席の角

一 あぬめもすと筆のあひ筋と之筋根竹には

一 きもすと筆を食うしサヤもすと是を

ク 穴紙小出ると云されが筆もすと是を

一 竹をと云、矢の木すの 筆もすと是を

一 穴もすと之筋と、小刀也もすと是

一 筷をと云ハ矢の羽もと筋をうす筋の紙を

一 少く事也是ハクをはすの墨を古書は紙をも

一 紙を筆ハ白き、紙にて少しき紙を筆ハ白き

一 し用るは紫、棕もて方種は用の毛筆の筆、記

一 小左も右も筆を用るす、筆を

一 ハツラメ一 烏毛もき、ハナのもの本の筆は中筆之筆の筆を

一 カハド云ハサリラト但アカミテハクシキはハダ色モウフアヒ色ニ似色ハクシキニミカ朱名真

一 離ト云アラヌアリ、ト云ハカト白モクリ、筆をもて毛筆

うるうめえ

一 あくまもきと云ひ羽の鳩とくそろすすり羽の生れ
のキヤウチ用うみに

一 やうげをゑると云ひ竹の枝とくみくらはの
スカミアヒと黒うるうめと云はせどもえ、
きがとすするべつあーのトヨハはとのこへて
は(うけて) めるか(かづ)トトのからぎを
のこあるあー

一 ちの音ようちうるーとさすとえ、方の毫モーメ
キテ御の下すすむうふ小麦の粉をかー

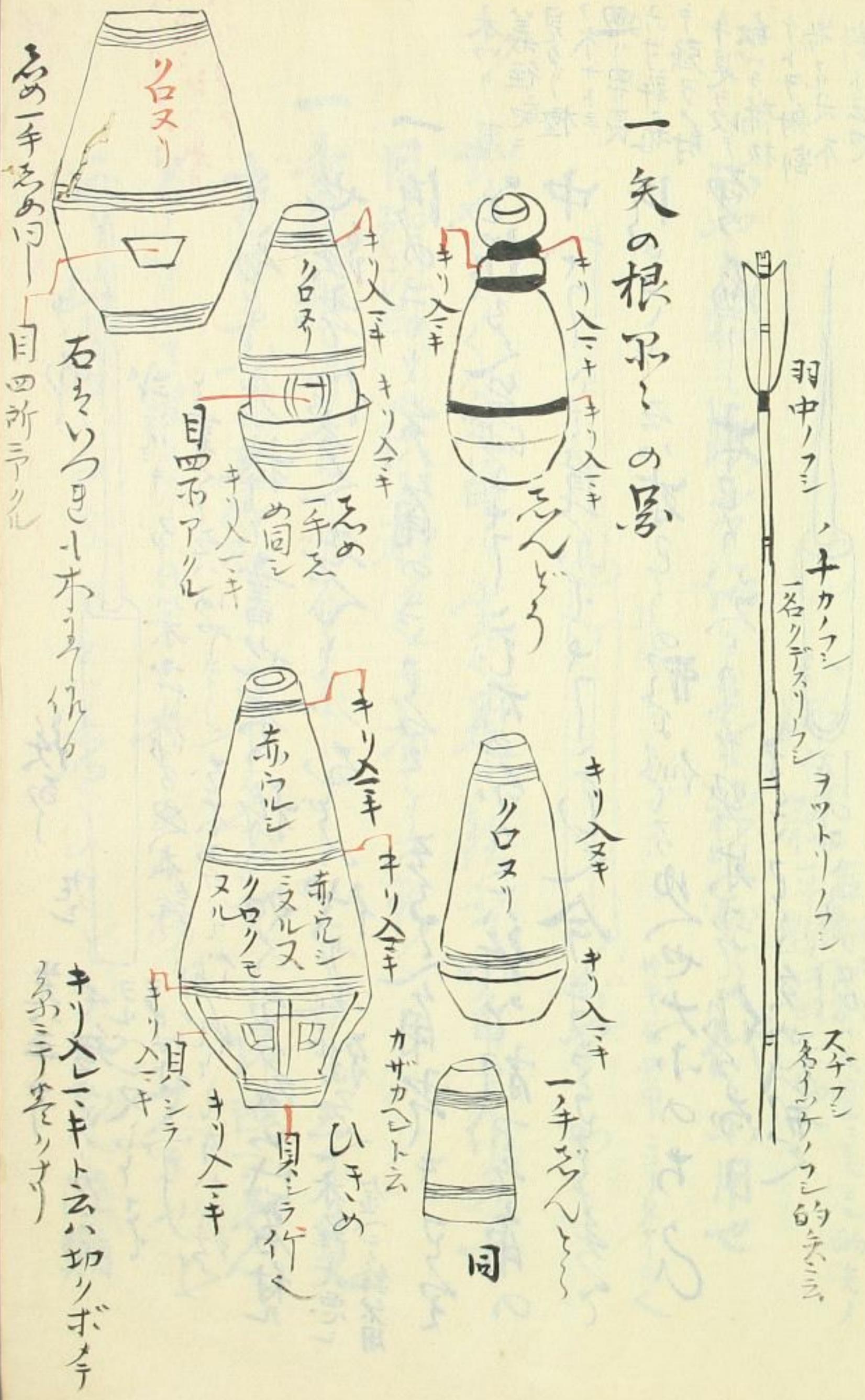
まやくはるすこすみわじけぬるすゆゑ
一 矢のをすそと云ひ箭のキモと云ひ一巻の羽の
上のくまとぞそとぞそと羽の下のくまとぞそと
算の本の方とぞそとぞハ羽、生の下の方とぞ
セモモモモモハ羽の下とよそとよそとよそと
縫の形のめくぞくねのぞと云はば
とぞをぬはなこ

一 のうちのうつき、トソ、トキ、けふくとくとく
太平記卷三十三軍余ニミ未ニラアヤノ算カキノギ
のえかく
おの根の矢(のこぐら)とくもくとくもくとくもく
かく

かくおうとくうき

はあと乃と云ひふき
又食りきとも

大將とあらへあつて云ふ事のまことを用
ひの字を用ひて西の字よりかどりとめ
やと云ひ、矢の箇はぬしと云ふゆゑすと矢
小ちてやのそつ不遠げ云ひてある所乃
やあらうをもすすや、さうもすゝきま、是
すとひとくわざの教因とされ、考的多よハ
喜びやと云ひ、一毛ぞも一毛冒と喜び、下
と云ひ、大射、坐射
か坐射、羽のやと云ひ、射矢と云ひ
おつとのやと云ひ、射の具三秘傳尔と云



七
一

後序

先づ平ナリ

きぐものす
れおじえ
大牧アラ

或況キノアハ木ナリ作リタニ木鉢
書くムニハシヤマニモ木ナリシ

又

木ノリノ事
義往記
見クリ 檉
木ナトニ
迴リ四寸長
六寸許ニ有
テ強弓ノ射
年是ヲ以テ
船バラ橋板
ナトヲ射宮
物ルユヘ木
割ト云也

事
射
枝
木
也
中
に
算
下
シ
レ
シ
今
ま
く
も
と
六
本
の
形
似
る
や
大
小
の
ち
ぐ
り
本
の
大
き
本
を
作
る
ま
さ
く
ま
え
は
形
く
れ
は
ぎ
く
別

ほのぞと
ハ別

ほのぞと別れ

もやう称吉高
平賀云書三ノ久の物也

長短ハリカニヨルヘシ
サキモ四角ミテメイテ

ちやうらく、定角を書へ是れ終て四角より之へ
回びかど代は村邊キヤウの也
一書き難く、字書は小ぢよあつや。ともせん三キヨ又
十もこす。トもあがくさくさす。ト歸陣。ぞ
ともと、生すき。モニ。ちやうのくわから。さすがにセヒ
柯はぢやうと云ふ事あるのととをも泥鰌

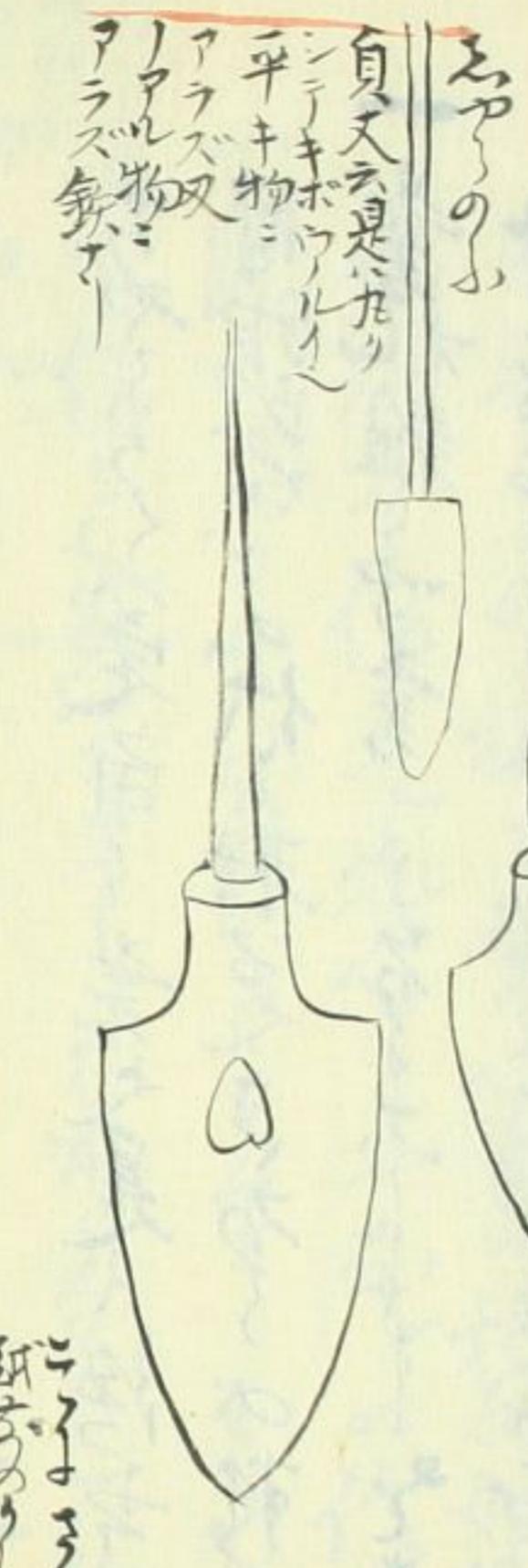
詩用集 蝶虎い矢之根也ト見エ

夜尾と云事より、鎌鋒圖景カツシヨウを見、了然リヤン也。

1

太
文

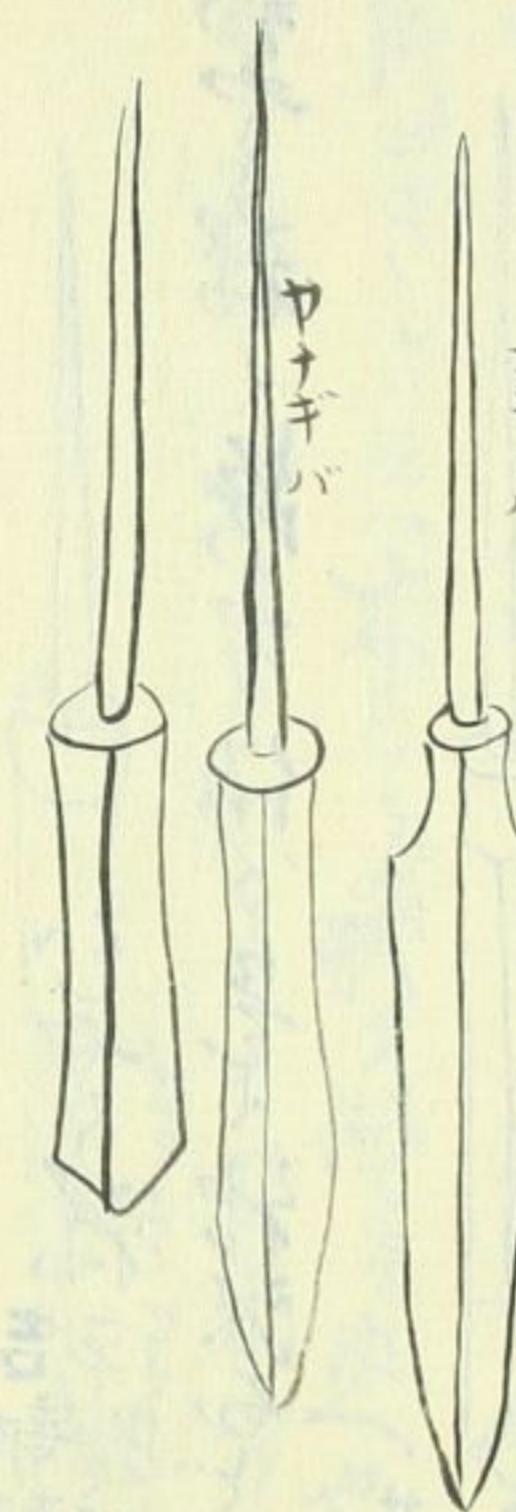
卷之二



二十九

やあ、まよ

けり
さきと

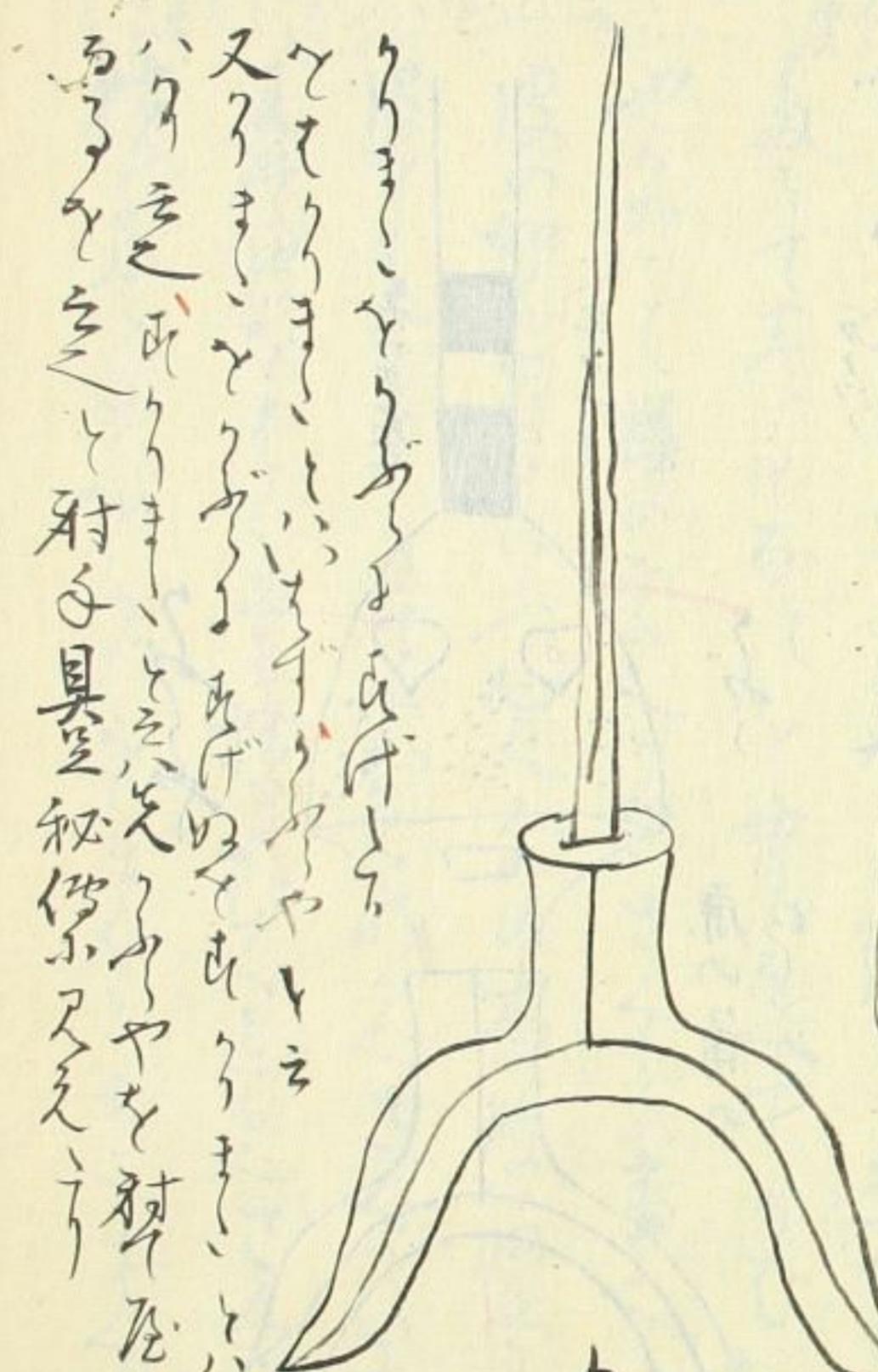


ワタリリトトカリ矢一物ニアラズ

トカリ矢

六
九
三
十
三

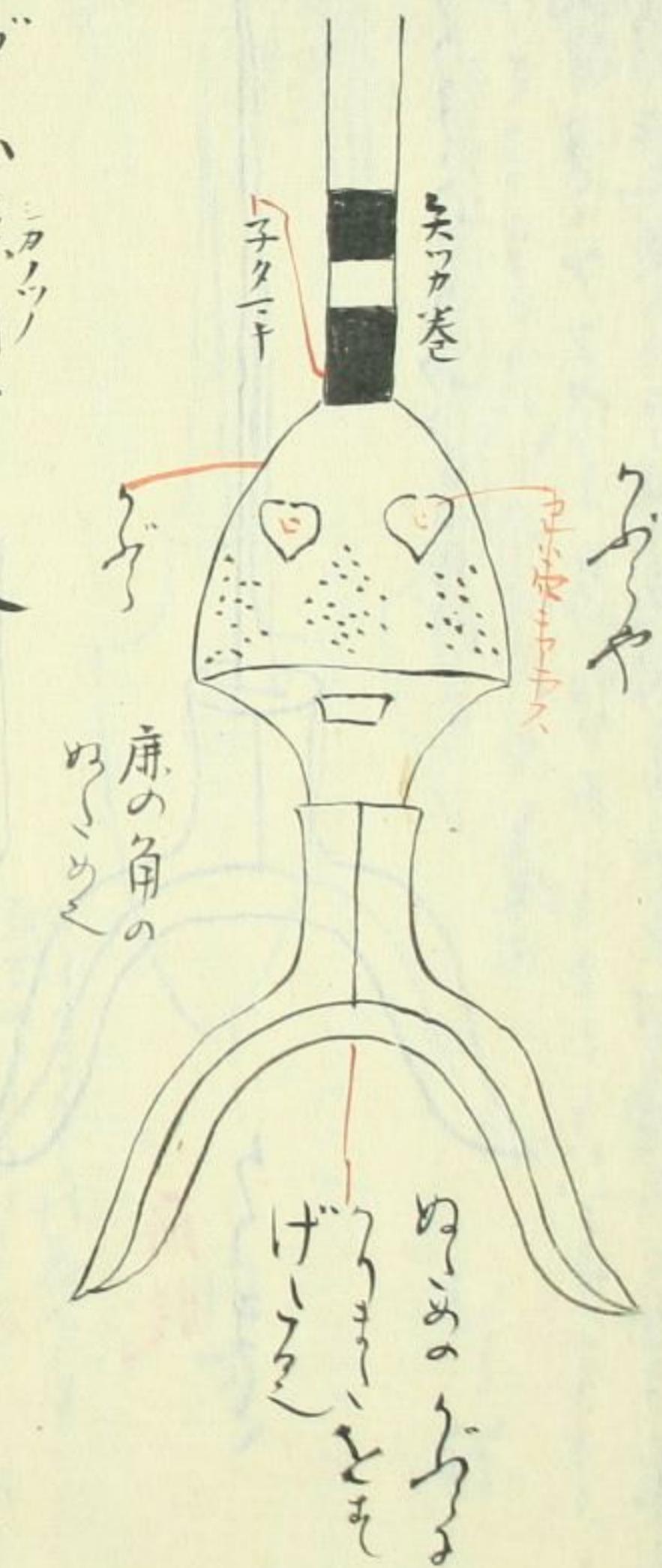
雁股



とてそくよし、といひすう、ややこ
又そくよし、といひすう、あげぬとあくよし、と
くわき、所くよし、とくわきすうやを替へてくよし、と
くわきをそくよしと對す具呈叙係尔又え

東木抄

一右角、麻角を入へる。めの根ふきにひらへ松
の木と三方よきやもくは適るが、射るまゝ、うつまゝ、
をもえげしき。うづ斗キ、射る。外の木のうづ、
一右角ス矣。右の根ふきで射す。左の羽の定リ



それが矢をもつて、一矢す矢のうむはキハあま詫
一大射が笠射ううきかきもくさかとハ
矢うの事にあかもも食のよもちよめ行き
一弓弓を初め兵具のたまは佛ほの近所、夏兵具の那波
一弓弓をと八筋ふさす佐多の弓の白生兵記もんじゆ
とづくとヤ一弓弓を八筋ふさす弓の弓の弓
付きもくらふる弓を弓を弓をそれよもきめふよ
箭はすと、弓の弓をと書札難い書に弓をよ
弓をよ、弓をと書札難い書に弓をよ、と
さめどくふ五射をまくを射、ううき、もひも

あやめと云ふよあれどうそでうそ
筋子はまきのうらがよしますたゞ是が寧て又ひ
至るの時おつとくのゆゑとさううりが身の時、うぶの内と
ほほえぬ事げ、すを持すやうであつてか實によくえゝ
うれひよ矣ようし極墨、書れ難いす書よけ

一
まちと、ぬりも、りと、
日五医附の書の次
て他念を、こころに
て、心を、くわしく
いと、我ねえまうと、な
くわしくして、他念を、く

新ひをもて射、あくすりて「一」と

参考保元地傳は然あハ而爲後之の事と云ふ
不矢の根、指被毛矢す。根のよことくある内
をさきに矢を厚さ、矢の度さす長さ八寸二分
まろき毛をハ角ひて毛アキセト一矢三弓とハ矢の
根の本の方矢の切口を圓形記す。打ち筋とがまろき
ヤベリ毛のとくらうと筋をゆゑて。馬布近ハ天文十三年十二月
弓字揮の字と用ひどもアヤギリ本一矢の字と用ひ。毛
のえのつゝの字ハ「毛矢」也。又「毛矢」は弓矢の筋と云ふ事也。
一乃弓と云ふ武具の如く。射ス。毛矢て武具の如く。射ス。

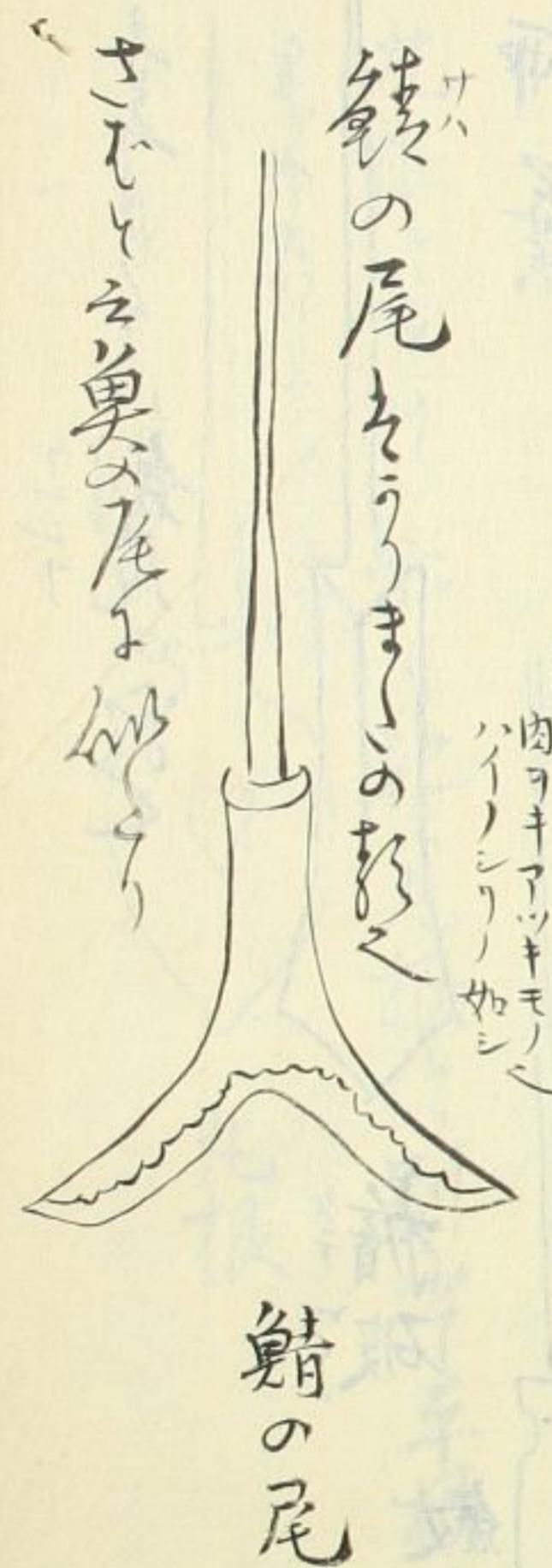
又ヤウシカタモ云歟九根トヤウシガクトハ別ナル也

一丸根と云矢焉、楨葉の如クイーイ中ニ立テ立
伊川玄旨弓馬圖書云丸根、今人ハヤウシガクト甲ス根セト見エ

射手具豆秘傳ミ云征矢ノ根ハ九根本也

家中竹馬記ウホミ大サスハ征矢ラサスハ筑波ノ略儀之根ハ九根本楊枝形ニ**鰐尾モ穴通**
サス一弓の舌と云根し板葉のこゝり弓の舌の形之中小弓

のキを無る板葉の號之丸根トハ年五之



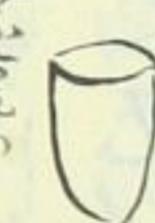
一木ノシテハ劍尾ケニシテの意

櫛破クサヘツ

劍尾ケンシテ

一桺葉イチカキ

椎シタマミトニ
本名劍鋒ケンボウ



平題ヒヨウ

一リ、近キニア河アラカニ延喜式と書小延年中林葉の角の大リ、近キニ角の
御、つま木の大い近キニト。上古延年比ハ
今のはテテテ矢のこと。角又ハオホ作メ、威
一弓小少く者ハキ名ハ薺藤クバトケト之薺若ヒリヌミ
鈴ノ字書タリアヤマリナ

莖乃波都ハタケ尾を有トス
一弦余ひく底トトロ小仲コノシロをもて少すあめのて稱是
一ちの木竹と呼カタマリ野猪イノシシの肉と煮てそりうれ程シテ
めうね之尾シテとシルト是
一ちの尾シテと矢の根あり、蠅アブ之虫の尾の形の如

九根クモリタケ

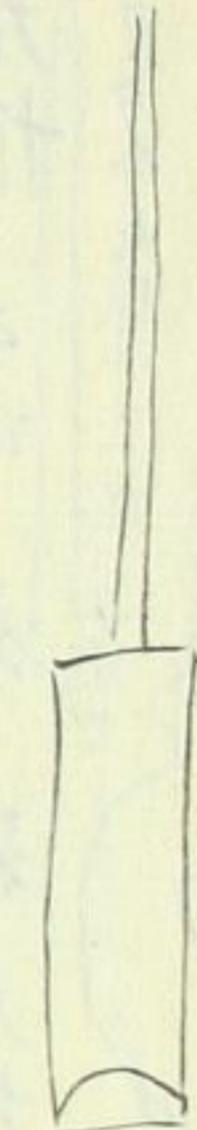
蠅尾アブテ

一九根と云々す。紀ス九根トハ別乎平根の意
是ヲ今九根ト云々平根也

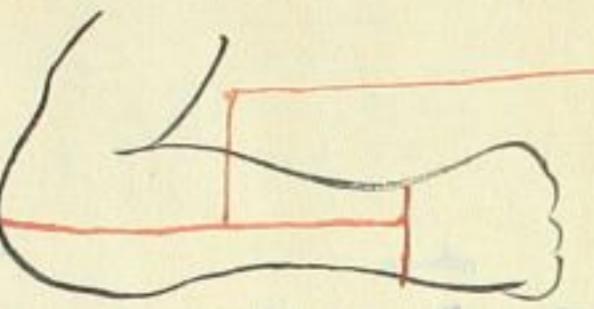


九根

一乃根と云ハ鑿金のこゝ



卷之三



此間我指

七経ち尋りてあれ、上古のちの今までのう
伊ふ、もとす人傳ひ曰く、古事記の大本
同く、至る所へあつて、陰陽宣賛の書れ、時代沙
と、書は、時代のうのセサハミテ、カミ人代ハタキニ
シテ、ナムサス、足の時代の矢ハカミト、人代
ハタキニテ、或人カミト、至る所へ、りくわくわくは、行
き、うよ、仰かー、後、矢、河や、モ、之、時代、秋の役
用るる、あ、うき、醫薈の、姿、上を、も、あす、病人の、指、守
て、とて、そ、と、姿、下を、や、あ、す、と、と、上を、も、う
すと、因、かす、ま、矢、人、も、さ、く、の、指

引矢寸
尺長弓用
弓箭事
記ス古事記
上戒之

乃すと用ひれどもかのちすゑ等冬に立て
うきよす人のまゝて右の圖者すふるいぢり右
我の守て定らるるすどく以ソ叙後句人好依弔
僕野矢と名東陽行へえり雁傷之矢の事
弓馬故ま云南世かやまこと唯まことをうりゆ

ほの度訓従事よ楊う雀ナリシテ雀ナリト云
生う雀と名すテノモハ主ナリキナモ付て云
ヘリ者雀と云ふたる也近世と墨ニハモレリモ
一 仁矢ノ軍陣の多敵と征討政事矣而左征矢と
書之是准ナシトロアヤ 仁矢と書てもアヤト
シヨクハ 箕父而自文 按既不モヤヒニ有モ
モビリ矣と云を里ナシキヤト云ウタテスル
宵の事ニ 仁矢キハ能ナシテ宵ナ有ムハリシ
也日本紀神代の巻小大日靈子天照大御神有ムナ
自丈之比說 甚ヨシワラ
シテスル矣
シリ

叔と、翁の室之跡代す。伝承とて、肖有肩負ふ。わ
せ、肖、大と書て、そひ、やと、もじこそひ、やと累、
て、そや、と、ひ、あう、一又、肖矣、と、書き、やと、も
せ、ト云々、立衰通あり、あらや、と、見、すと、因、見、
一弭根、ト云ハ、弓の弭の根の弦の、かく、名、サク、ひら、か
る、矢、を、矢、と、も、す、も、う、と、之、も、す、の、名、所、を、ゆ、よ
つ、ろ、く、む、近、年、儀、と、仰、て、そ、見、と、も、す、り、む、と、云、人、ぢ、あ、
み、く、す、ト、云、ハ、め、ト、云、は、ま、す、根、ラ、う、野、菜、よ、す、ろ、と、キ、も、く、根、を、ま、美、
ナ、セ、ン、ト、云、か、く、す、事、古、書、よ、か、
木、ニ、サ、一、矢、の、羽、を、え、や、く、む、か、と、も、す、り、又、ひ、さ、こ、も、ま、ま、
は、量、ね、ふ、ま、ま、羽、と、も、く、ね、え、や、く、む、か、と、羽、え、

古ハ白キ物

タトヘニテコ

花ヲ云ヘ

源平盛衰記卷

三ノ名橋合戦

金

車モ太ク星ガモ

才ミ毎リテ皇元

ナキヒナコノ花

各ラユウカホトニ

アリ又バイヌ

ノブチ藤三

作レ有リフニ

ミラヘ先ラクキ

シカニシル

ラメテ置先

タナクル新ラ

菊形ト云先

トハ云アリ

御

御ノうば

松鼻

トモスヘテ先ニ白千新アルテニシヤノ花

トハ云アリ

シカニシル

ラメテ置先

タナクル新ラ

菊形ト云先

トハ云アリ

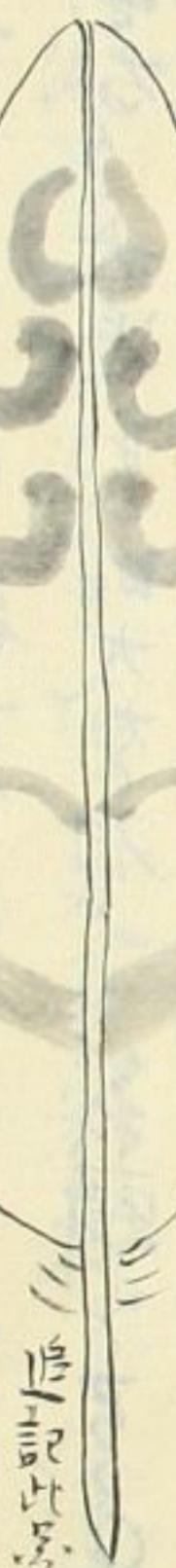
シカニシル

ラメテ置先

アノヲテ事是ヨリ未ニ十二枚ノ記入往テ見シ

一あゆのわカテシニ羽ノ写

あまおまちの羽ノ写



は通了トニ止の方ヲ羽ノと云羽ノ長サ九斗

アノノ羽ノ写

ヤカニキノ般

シ追記此ノ

アノノ羽ノ

は通了トニ止の方ヲ羽ノと云羽ノ長サ九斗

アノノ羽ノ写

ヤカニキノ般



は通了トニ止の方ヲ羽ノと云羽ノ長サ九斗

アノノ羽ノ写

ヤカニキノ般



は通了トニ止の方ヲ羽ノと云羽ノ長サ九斗

アノノ羽ノ写

ヤカニキノ般



は通了トニ止の方ヲ羽ノと云羽ノ長サ九斗

アノノ羽ノ写

ヤカニキノ般



は通了トニ止の方ヲ羽ノと云羽ノ長サ九斗

アノノ羽ノ写

ヤカニキノ般



は通了トニ止の方ヲ羽ノと云羽ノ長サ九斗

アノノ羽ノ写

ヤカニキノ般



は通了トニ止の方ヲ羽ノと云羽ノ長サ九斗

アノノ羽ノ写

ヤカニキノ般



は通了トニ止の方ヲ羽ノと云羽ノ長サ九斗

アノノ羽ノ写

ヤカニキノ般



は通了トニ止の方ヲ羽ノと云羽ノ長サ九斗

アノノ羽ノ写

ヤカニキノ般



は通了トニ止の方ヲ羽ノと云羽ノ長サ九斗

アノノ羽ノ写

ヤカニキノ般



は通了トニ止の方ヲ羽ノと云羽ノ長サ九斗

アノノ羽ノ写

ヤカニキノ般



は通了トニ止の方ヲ羽ノと云羽ノ長サ九斗

アノノ羽ノ写

ヤカニキノ般



は通了トニ止の方ヲ羽ノと云羽ノ長サ九斗

アノノ羽ノ写

ヤカニキノ般



は通了トニ止の方ヲ羽ノと云羽ノ長サ九斗

アノノ羽ノ写

ヤカニキノ般



は通了トニ止の方ヲ羽ノと云羽ノ長サ九斗

アノノ羽ノ写

ヤカニキノ般



は通了トニ止の方ヲ羽ノと云羽ノ長サ九斗

アノノ羽ノ写

ヤカニキノ般



は通了トニ止の方ヲ羽ノと云羽ノ長サ九斗

アノノ羽ノ写

ヤカニキノ般



は通了トニ止の方ヲ羽ノと云羽ノ長サ九斗

アノノ羽ノ写

ヤカニキノ般



は通了トニ止の方ヲ羽ノと云羽ノ長サ九斗

アノノ羽ノ写

ヤカニキノ般



は通了トニ止の方ヲ羽ノと云羽ノ長サ九斗

一矢合ヤゴタヘと云ふゆる射アサヒりてありて、矢を射すと
云ひ大追アシマツの時、大を射アサヒ、我頭アタマとちむルるてあり
トニテ、少スカシ之是矢合ヤゴタ也。大追アシマツの射アサヒは、其シ記メモ小コト又アリ又アリ
の時、庶アサヒて射アサヒて矢ヤて、と云ふは、私アシマツとあはなければあ
チアシマツ之シ物モノ視シテ見ミえス。

的也記よ又えり又犬村墓目矢音ハトキト行
ト云之大追也の書よ又えりひやうりひのくましト
云皆矣のとあはるしづくまし一トひひト
トひいトテテウト云皆也よ一トひひト

一矢さばびと云ふ事と 射て物のうちに時我肩と
ちむつあしてかくとひとすくかけ事也あらち
すよ記して矢晏のるや平家物語は射て物の
花もと射れりふとひじうをすけりやまう
と矢さばびして とほ又夫木抄は信定の歎
可多き かきのせうの矢だけひよのれぬ唐の矢

内向
内向と
内向と
内向と

中也うと見えう物の附へ部と附と乃りてある
其の外はすすめの矢をもてし 大迫あまがおへびを左ひき
てあくアリキアリキアリキアリキアリキアリキアリキアリキアリ
は參けひるよ吳後多氣れとし
被接をき偽多用り一平家物波夫木物接用記
多氣被接とす一矢やけひき矢と云ふ
一矢ナ内向と云ふ矢とちよつひて羽表我身方一もく
えと云ふ向と云ハ羽表我身方方之向と内向と高
上さる的矢と云フ一矢為氣之向と甲矢弓
射之門向と云ふ射之が向六陽の内向は陽
乃至と先かて陰の矢と後か既にと云ふ内向の向と云ふ
内向の向と云ふ

一外向と云ふ小射の内向と大矢の射と云ふと急
被定じる法ヨリハレ大右のめぐれると云ふ
云セヤれハ量的大的射降記と定めふと云ふと
外向とも云ふ射と云ふと定められと云ふと
以定法ハ行さるると云ふ又的射記と云ふ
射射と云ふと射記と云ふがもとを大射
内向と射射と云ふ射記と云ふがもとを大射
云ふと云ふと射記と云ふ是を考へ定めふ
行けきと叙事と云ふ
弓の射室をもやかと云ふ内向の向と云ふ

カニウギビキモラムサゲト羽裏ムハラス
ミヤヒタニテモシテ矢矢トミムモシリ
トハ羽裏ムチ向ムト内ムケルムモチシム
それム空羽裏ムチ向ムハ内ムケルムモチシム
外向ムト羽裏ムチ向ムハ内ムケルムモチシム
一はくらム高ムズムスヌメトロハトシムシム
トカナセ如打釘ムシ保えム信シタルハ命ル朝
カノソムラセ尺半守半丸ムロトアリヒタム根モ
太平記ト大塔宮ニ所歴ムラ銀の丸十文ナ又
振ム又回記銀の丸モラムラ通ムル文モ

合せてもうかとあきと左の肩よりけ。又圓畫の銀の行く
モテラチのモテラチあるとやれ。ゆくゆくとる
モテラチにり以てお打とお打とま。又一枝うちの彈
乃事と内ぐとま之原平盛裏毛上ト乃彈小角入
うちを差のち打モテラチとあ、うます。かますとふたも
キタうううとま之是、お打のするがゆす。彈
乃事彈ノ字マクタカナ人。或人の後よち平社は銀の花くと
ゆくはちあの方を近傍の宦人の背うちのやく退とて
うます。おすとまくとくことくは後些銀の純
オモトと云むのよもんとひてつまく。おとお向いて

お行の事と知て又弭の事と沈と、事古いよ
うでえさるす。下枝の盛衰に下弭と弭
浪の沈う
一矢の旨よろきぬとひがもうちよ、算けられ
算竹の事と(も)うき竹とちくしもくら

中ノ一筋の事ナホ也。中ノ乃事。未だ経鳥城
源平盛衰記
卷十九八枚夜討、余云
爰ニ武者
入進出一
御通のうへ夫トテ上手のうへの事。宝弓兵
名示ケル。何
内國人達人合
郡國を守
櫛、わらや
不帰軒を守密シメテ是ハ筑紫守佐八慎ニ

天子あえがれまわれとけ壁紙の東寺卷てろか
トク、トク今レ不除とさす是と神通卷と云
自丈云神通の牆紙と云ひ、内町村の方入用
古傳書と云ひ、田村系紙と云、古キ物語と云通の牆
矢と云ふと云はる人の云ひうやくの界と云、ハ
神通の牆紙の云は
神通の車と云ふと云えど、佛は既と云通
レトモ其考
奇妙聞カ
セシ為カリ
一吉在シ
中古以來
武家川
云う云ばれは不思儀上方事よ通達あると云ふももわざ
ういとく考ふ神通の行しゆるをうら方の
云う云ばれは不思儀上方事よ通達あると云ふももわざ
アリエヌ
三人張ニ大
中利取テツ
カミナユホ
ヨリ引カタメ
エタタ
或説云シ
ラハ神通
神通ナシ
トモヨムニ
トメヨムニ
アケサルカラ
ナクトスヒ
スニ説セ
追考神通
鎧ト云フハ
何ノ故ナテ
レトモ其考
奇妙聞カ
セシ為カリ
一吉在シ
中古以來
武家川
アリエヌ
三人張ニ大
中利取テツ
カミナユホ
ヨリ引カタメ
エタタ
或説云シ
ラハ神通
神通ナシ
トモヨムニ
トメヨムニ
アケサルカラ
ナクトスヒ
スニ説セ

状見聞記云偽書ニ神通ノ鎧矢也トテ六角ニカフラン

神通ト云同
佛は元
河す御直
ノクツラム
大悲ノラ智惠
ノチドクク
ハセリ
ムルメラ
ムルキコ
アリ取ニタラス
信用レーヴメルの事況立ラタス

追考流傳
馬用弓
ヲ直重秀
トイズシテ
シラニコト
カニルナラ
カニルナラ
ノルヘン中石
ノ風ナシ
ノクシ
又を、やめよ用ラヨ
ハムニハ白巻リセヨハサ
とぞくろへゆる繁重ナヒラの事ニモセ室ラ五體
ノハ白魔ニラニ事ニシテハ遠あれヤト因レラ

○さう一筋コトヤドケテ
一毛じ算ト六八とも一算の事ヘ
ミハ算ト之をつてもひきせらる心ナリ

一筋ニナシ矣の数の事、保元物語、
事をうきてる事不ニク矣、たゞナキ、めき、ハ乞び
あひく、カクナキ、ナキ、矣、つる者セラハシ、唐
軍ナサ四、一キリ矢、二ナキ、一、三ナ、一
九ナ、一矢、一ナキ、一、三モ此ナ、一、九矢
と云、乞ひ、ナキ、一、三矢を乞、宿と一腰、二腰と之
一、ナキ、あらハ、主謀のちの、一、寢弓兵、經流縛る
神通の、ナキ、ナキ、ナキ、ナキ、ナキ、射る方、ナキ

追考要

白卷上
アラシテニヨリ
カヲナガテ名
カニキテ讀作
事ナリ是
中古ノ年
真ノ白卷
前木言
木アレ也

流滴るゝ弓、筆者矢かくやと云ふ。モリ、
白卷弓、白差と少く而弓はキラニキムと曰
てエマキラトミ。古ノ次本よりの源白真弓トハ
別流福馬用白卷弓ト書へまなハ白差少く之
弓の多カの上彌トミ天武守程ひひちホト
ソニ是ハぬせ多ヒセトトキ。尉の府隠ノヘモ能
立モカラシテカニル。此御事ホトミ。司徒人金三
十九代天智天皇の御魔生ヌ。お多ヒテ高ヒテ高
キモシ人トリ。附はキサケコトのひ。而モ
ホト名目。ソトヒは往復用也。

スルカリ秋の事のあつたるやうの名トアリ。アラハニヤ
信實ノ羽目

一弓ハあくの蛇をク、シテ仰イシロカセミ。説
は後非之用。ウツア至蛇とク、シテシロカセミ。ア
木草洞月兩頭蛇の注。越王奴強之所也。是ヲ
越王蛇。木草洞月兩頭蛇の注。越王奴強之所也。
キ人客を招て酒を呑セシ壁へりす。掛手も角弓
乃井盆の中。ようはて蛇の形のゆく。又えり。客
益の酒を呑て病を癒ひ。りと。シテ書言故事
と云。書小物。原の弓。角。作。竹。短。大。城。王。奴。強
。又頭蛇。是代。ある。盆中の蛇。事。を
思ひて弓。五。蛇。す。シ。ト。ハ。ト。ミ。説。と。ハ。キ。ア。リ。

志きりもキの矣と云ふ白羽ホウと惡羽アヒとつゝ食せ中
黒又シロヌイ、中白又ノミシロヌイ、つま黒又ツマシロヌイ、つま白又ツマシロヌイとゆくとくす之
白又シロヌイと立らぬをきり 羽ヒと云

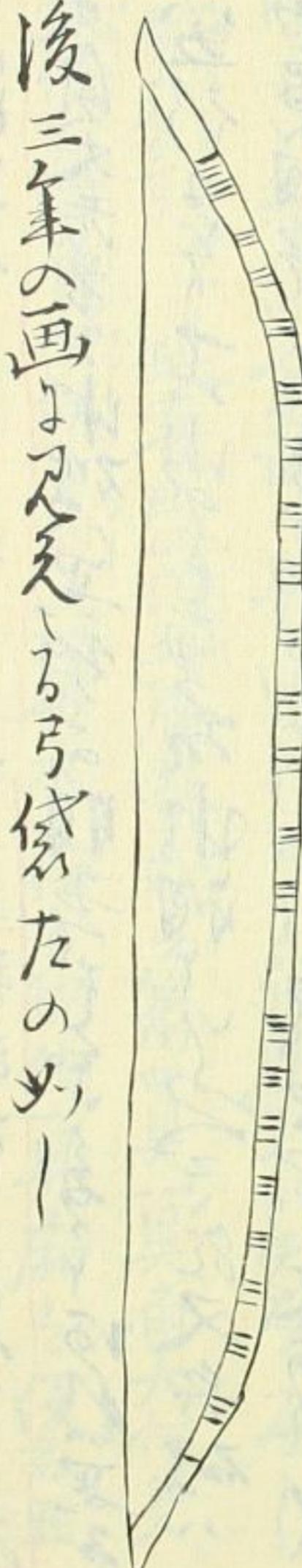
一、やくらーとて多本ナキ、多子也
見(ト)リトアリ
大和木草ニ云、和合抄白順、和名比佐加木西國ノアリ
玄葉モサレ花ニ似テ、墨實丸玉爲白於似箭可作
條衣者、古今俗ニサキト云、其灰け用テ布テラドニ條ム
黃色ナリ木草諸書ニヨイテ未見之、本草考田村元雄云
ニサキハ遠州、アリ大和國宇太郡方言勝羅椒ト云
ヒサキ事ニトテ、葉(ト)リカミニシクレハ、黃黑色ニ
ナルト云又、人之一名ふくわホトトニテ、
一キモトトニ矣の根、後漢書ニテ木の棒の如キニ
き、やうめすれ

右の手本ひがふくとてつゝやるか化遣トニ
襄紀は化遣の事と用ひ一ノ万葉集化夜トマリ
一矢をさへて平家ゆきと書卷より一束むろが
ノ和田少佐印年義盛とうりと書けと盛襄
記と羽木一寸斗をすす浦小ち印と書けと焼給ひ
り又同書と黒塗の矢の十四束あると只くうり
と削りあけ新居紀四印宗と書けと又東籬
子箭口巻之上注陀口三郎左京経後と又左京記
に相模國住人中間強當印重氏と小刀のヤキ字と書
きかけとち馬放室を多手の事三方書也是

平人もせひりてかゝりの節のをこまへ、煮飯せしれ
より煮飯、既にけふのをこまへ書く。而の節せ
けがのをよも付、走羽の通、一方よも「一也」別名
糸計、くくね之南世、國石、まの名を宿すれの門の誰
と我名と書く中、キヨムラヤニセキモ、後大追
あ紀、大村、くくよ矣、とす、「矢」と問は時入らせ
羽中、かつてのやうせ、げゆよむる之羽中のあ、自
よ立方斜砌、下のやう、秋んよ、いもんぬとす
へき、くわれとし、大は御所、ねを被りあり人三日月ち
成の時、いろとて行ひ、みよ放へて、自文按矣、字書不

前中おとくの常出げやへ書くハ燒符燒文也
スラヨリニテモ書ク墨少てしかく小刀のまきナキ
書く又書羽矢寸計のけで書當そトシ上あ
書之又玉不まの官名字それ内記ト書くハコトヒ
立的矢弓常ト射る矢の弓是ハ名意計書下
軍陣の位名六國不まの名字以下書する事ナシ
ミ族六敵ナシセキアノ大追あの時の矢をナシ
紋とおくるハ人なる我名とすませテキ乃ヒトモ
紋ト家紋とす何ハツヘン元と繪く
一後三年の画よ見えし弓ハ丸木弓竹と今せり

弓矢脇アシタマノ一弓左の妙



一後三年の画よ見えし弓矢脇の妙

弓袋差の役アシタマノ一弓左の妙

ロツタレ
ナニヤウ草ナリ

一原三位相政アシタマノ一弓左の妙

名づけ弓の弓矢と小破無破弓矢と山破と
矣黒鷹の羽とてとぎとひとひとと山の羽也

むきうろと原至盛襄記よりええう雷上節のちハ、
乃所まええすれ、けり矣乃名いあかども、
くノ預政よりて、事に小而正談ハ知れ
ぬ事へ推量とす、いそじ获生西邊、内都武御と、
儒者の方は雷上節ハ預政藤國下と云けす、
乃ひとをて、あとぞそくらるハ預政友と名づ
又圓丈考るに破、平鷦の羽者も、每ト預政黒毛
笠羽よどりて、少とも有れ山羽、モ既又兵破ハ
山毛の羽者も、といひ山毛の毛ハ墨毛文河て
鷦の皮乃黄毛毛は墨毛、兩と三の星をゆうト似たり

條テ鷦羽、りの(モ)元考是推量の役に定めく、一

一海キニ矢トシ矣何、是あキ、ちよみ目矣、矢有無、
申キテ、延喜式の内無庫掌式、第四具、真角大伊多
都伎、具角、細伊多都伎、一具木大伊多都伎、一具麻、
十隻為真具別功五十人、何又鐵十二分熟銅券、
都料用、資家物、と因書、又、府、伎筋、伊多都伎、
ト、考也、はま、各、征兵の數字ハ、す、テ後又、
洞、矢矣、而ト、仕立、的矣、あ、し、内、き、弓、射、筋、下
一、は、き、弓、と、弓、打、弓、弓、射、筋、の、倭、名、抄、
唐令の内、國簿令の細射、筋、と、文、と、引、て、今、按、此、間、
書、名、セ、
唐令ト云書、内ノ篇、名、
唐令ト云書、内ノ篇、名、

白石先生文集

近世野官寧相定基ワ(新井能博原君美
南キ、弓乃す召す年セタレ、真巻或、真樟トシヤル
附字、字事ニ犯中ヒシト和訓ヒテ、うちニリ年功功法分九言
音ナシのちハソトスウのカトカモヒタキ可モトウサ
ヒテヨリノは西キ、ソニ前ナリム大内軍の事ナムハミ之
ノれ則真樟の事、白檀紙或紅梅色紙、青松玉角
之、背ナシ、墨石、三ツノカヒ一乞又國大曆の後、同ト紙五
樟かとぞぞくする此ハ、以復之門、近府主又中院入道の
由、キと終射、ソニ云ハ左樟紙などとぞうらのす
よ、御す別子、西ヨウラヒソウカヒ、ソレと終射

寅文云ほゞ、弓の事、矢本取て、弓臂リニを仰ハシう歟

金子は、古の事

陳貴玄
歌

丙子年
天仁元年顯
壬午
鄉家次合

琳賈

左の勝に付テ射タリ弦ニテ韁ラモリテテ又舍ハ韁上云おと
思ひてひサリをひすまうり、と云詞、ちどひキ、
多きをもあひゆよ、ゆすげ樂を意ハラの木、竹と舍
と音をしむる事とぞ、さればひきもあういと云詞と
あひて、ゆくのみんとと之を含セ、方物としきもも、とて
含みぬて又としてすきむと云詞を、筆者考下す
引て、而川、まへづて、は、すも、すれを引ひもひす
河口と云之是含せぬとふ也、ヨリもすく之又、通の事と
あくとも之、緋母と西モ、緋母と西ニトミ真間の
緋橋を、あくとも例え木と竹と緋母、含めまぢか
るが、緋木ちうて書を、西キ、らゝと云ひ、又倭名稱子細

射字を萬々岐由義とよしす、其御の字、龜^{ミツ}對
山の細少丸木弓のアラク松の角^{カタシマ}骨^{スケレト}にて
木と竹合へ弓弓のアラク松、細^{スリ}石^{イシ}有^{アリ}と以^シ萬々岐由
義^{ミツ}、細射^{スリサ}二字と嘗て^{アラシテ}アリ。延喜^{ヨミ}或^ススミ^{スミ}る
席^{シテ}位箭^{スル}、萬々岐由義^{ヨミ}アリ。見^{スル}事^{アリ}。延喜^{ヨミ}
或^ス席^{シテ}伎參^{スル}と伊多郡^ハはの一^ノ射^{スル}事^セ又^ス門^ノ郊^ノ市^ノ之^ハ
酒^{スル}事^{アリ}。延喜^{ヨミ}或^ス事^{アリ}。考^{スル}事^{アリ}。キ^{アリ}。矢^{スル}事^{アリ}。射^{スル}事^{アリ}矣
矣^{アリ}。坐^{スル}事^{アリ}。喜^{スル}事^{アリ}。と仰^{スル}と記^ス。射^{スル}事^{アリ}。年^{アリ}未^{アリ}
弓^{アリ}。料^{スル}入用^{アリ}。わ東^{シタツ}組^{カツ}織^{スル}。漆^{スル}。角^{カタ}革^{スル}。角^{カタ}革^{スル}。

これと併のる鰐のすがどをえずされ、延年比ニハ
ぬき、弓、あぐりて射とし、ぬき、矢のすゑえう
ぬき、矢の、ぬき、弓、ぬき、弓と、ぬき、弓
一白きの羽アヒタヒ、た、失、ソ、あ、も、く、て、く、
アヒタヒ乃羽のす
ふ、あ、す白キ、太、き、の、羽アヒタヒ、ある、略、
羽アヒタヒ、白、玉、弓、六、白、鷺、の、す、ま、ま、い、こ、
事、さ、き、已、一、の、羽アヒタヒ、と、も、羽アヒタヒ、羽アヒタヒ
一降、羽アヒタヒ、古、書、み、え、て、羽アヒタヒ、と、も、
角、玉、ま、ま、あ、み、う、黄、い、弓、黒、羽アヒタヒ、
と、弓、と、交、合、む、き、き、け、み、と、弓、之、れ、の、く

夫木移ミ見タリ
新ニ信官羽医ノ歟あハラ此瓦モイと伐れ、石竹のモナク、くもうち支乃成、竹ナモ
東船卷セ
鎮西以下諸
主進御荒
本
乃人内行と仕け、之を入テ、ソニ毫ナム取、正キ、ち書
中々乞えず一向記控シ、仍行用、一室町あ
時代もハ竹と今ちらへそひの近源、ええうり治威
思^{室町御内侍}兼良公の尺素、往事よ四方竹の弓又えもつて、五葉八
角^{アラタナヒラタヌス}、
うきみの本^キうちあり、而今よもぎます新本^{シラヤス}、宋際あるもど^{シラヤス}
さういたぐ、^{アラタナヒラタヌス}すく^キ、^{アラタナヒラタヌス}すく^キ
い人也、^{アラタナヒラタヌス}すく^キ、^{アラタナヒラタヌス}すく^キ
一在焉^{アラタナヒラタヌス}のす枝^{アラタナヒラタヌス}、^{アラタナヒラタヌス}、^{アラタナヒラタヌス}

一をあらのす後は即ち
一丸あらの事 義経忠信 さよ 十年 文治元 年 月
書はるゝも四の方へりありはるゝ名アリ と
おもてをあらの事の廢ハシメ ト一處ツキ ある
事アリ

セ木 ロト云

上古ルタム
トバカリニカル
セ花ムロ年
タルキリテ
紛レヌタメ
ガルノラム
カ木ラト云
耳レルナリ

ひきう房を卒業経が往く六軍場川よひあま
住む人へり作ればひきう房やタムハ旅、住之
タムクシテキマムモウシムヒヤルルハ旅
住む人トモテモテアシムクシナシムクシナシ
ミムアサトアモ、甲冑ヤミハレハチトモテ
アツマトヨセムスルウナリナリトテ少将
の邊四面白の中山をの羽の矢十二十カツチウトモテ
居てお角カットトモテ、毛馬カウトモテ、自史ミテヒセ
ト一様イチヤウモ本うを司カムトモテ、毛馬カウトモテ、
ベキシガ本うとこと毛馬カウトモテ、又毛馬カウトモテ

弓丸形

弓丸形

本竹を念メモくろちワリアラシトモキトはまれぬ方
丸本ちとひの名トモテて記メモくろねるメモ
一
ウ人ヒトの西ハタケトロ丸本ハタケトロと見ミ一事ハタケトロト松檜マツヒ
タマ九タマト但外ノ方サギ平ニアリ不ハタケトロト或ハタケトロ九分ハタケトロト丸ハタケトロ
京カイの不ハタケトロの方ハタケトロトモドウテ、御ミツトモ極カツ御ミツトモ
ワハタケトロトモ長ロハタケトロニ人ヒトモ零ゼロト也ハタケトロ正カツ隣カツセキト
のとハタケトロと四角シキトモハタケトロ、斜カタツムリト本ハタケトロトて算カウト月カウ
一
ニキトモ本ハタケトロのと多我ハタケトロ後ハタケトロ主ハタケトロハ祐カウト席カウト席カウ
モ開カウトキカウ
ハカラア
モカニナ
モ開カウトキカウ
モ開カウトキカウ
モ開カウトキカウ

康正元年

七月

原正後花
園院年号
お軍支號
ノ御代
ハカラア
モ開カウトキカウ

三から出さうされ、きうちかみす乃祐徳元
れびておとづれての日の暮れをあやめ、宿原
アムのえれよ大まくのしもきよきよゆのまわ
キよせそくせんのりん中とくともそばゑひをえ
けくなくかの多ふ、じぞゑゑがたと云て押あせたま
一をちむの羽、もうくほの羽ト部兼俱神代、
原平賀義代、中サシイホ、中信を山、金錢を山、忠信三、そめあひ玉童、ひおとし満月不一の
甲のひとそめにいこくわくらはら井とひるがま
かすみうどとき判す、トはだ、トみのひのちかせとす、ト

ノリ大中馬の廿ヤツ、ト上矣、ハ、トほろくすれめす
守斗ひよ大のうヨミナサ、ト佐翁家ト傳ト事
あれ、もろもよ羽をみてといふひよ中則、トいつ
の矢トト守トすとあ、トアマテラストアマタマト、トアマタマト
而、ト家トのちのあこ経トいが、トあとね

一犬射巣目



太少弓 カニヨル

二四レ・三行

太少弓

笠掛巣目



二四レ・三行

野えの
年正月
吉日

一矢羽と、たゞ此羽のみを射て、之を記す。左たゞの
多と云ふ鶴の事也。とさかを右安紅葉。

ちと云ふ物の事とされ乍ら安紅葉

一
らの事に幸とも言ひ得ず萬葉集ノ
七
詩ニ有る事の因河山よりまちゆきりす
今
すれど史文集等ノ二十
ゆづハ弓柄ナリ

引同考人と村なる東野經卷三四後藤新樂坐尉基清
が嘆徒と伊勢三郎能盛、下郊と翻訳の時秋慶池也テ
竹の根の引同考人残不正支々村勢高久多々又
國書卷之十、續朝上序より野路の宿す邊海の村落
家つる差れの者少くせきりと和東音印天成門同

今度村けり、則ちすらあらぬことを云ふ
事す。生浦寺より、引同寺へ倒れ去る
一弓の形古今より空て云々。序如

古の形

今
の
形

弓三間取
ありまつり

卷之三

弓三間和
赤工房

一弓杖考乃事と云フヨリ五
十六年六月廿六日付題文後
此の號を以て之に付す

至將軍の時代と、
此の形

ぬ山中よちりくひどくいしもめやし

一犬追わらひよき半板留財而祕付書は歩まう
の私事中と仰す、うとませて可もまくもぐくお村のう

一ちのみじまと古、辟者を走るる河、辟者を少くとも
スナ
物に非^{アリ}五種目管草を走らすより内へりと、かく限在幅に
管草を走らすより内へりと、かく限在幅に

一年冬比高严人葉松流寡干越後国寺泊浦仍今日式
部太夫朝時執進其弓箭以ト具呈若君御方則質
三月
於江上

北条陸貞守

假令如常但頃ル短一
似夷弓には弓弦

之奥州以下群参考ニ張真夏上足利直久ハ大内舊跡大極殿
の額門の端上者なほ布テ左ノテ右ノテ延弓被多とモ
龍崎よねせき我名父是草獲卷に夷弓草^{アシ}夷弓
鞋^{カイ}草^{カイ}と著セラヒテ右夷弓詳而^{アシ}す
按此弓と云て日本のみの國^{アシ}と夷^{アシ}と是之唐の弓
と夷弓と云ふ^{アシ}古自車^{アシ}ハ唐の弓^{アシ}牙^{アシ}と
毛^{アシ}ひ毛^{アシ}と云ふハ^{アシ}古自車^{アシ}ハ唐の弓^{アシ}牙^{アシ}と
東洋^{アシ}と喚^{アシ}姪似夷弓と書^{アシ}成^{アシ}高麗^{アシ}唐^{アシ}六別
國^{アシ}今^{アシ}朝鮮^{アシ}内^{アシ}
一竹筒^{アシ}リ古^{アシ}ゆ^{アシ}古^{アシ}秋^{アシ}物^{アシ}唐^{アシ}矢^{アシ}一竹筒^{アシ}

一を西の事 稲波の郊より至る

一糸裏のちとては夏を軍弓の竹の上波とて
一げぬま、打弓のやまと麻のよしを身てうすす
よし本も此とあきぬく巻きつめくとま下よハ
添とひて左之(ま附)セーメテ
糸のとセーメテ
時麻のまれかとせぬぐりてやとねうそとくとく
うそ一キ里ぬく狭くして邊をとむと左ハ東陣
布陣者へとせうすす西日帰を月帰を
芝文左半文字を卷きゆきとくや左せんと多きよ方接
ニ文字をゆきゆきを言日帰をいそぞのと接、文字をゆきゆきと

え右ハうもずの方へが左の方玉、八月晦日と名づけ
晦日とてやととをまくとすく左セサ未弭も木弭ハ短ノ巻
左あうの左ノ目にてまの左とて左之(矢あうハ少子)の左
ひかのけとて左ハ箭不と心すとせ成(ト)ルトセ
ア(ナ)ハ箭不と左トハ左せんと左日とて左左の左
左(ナ)ハ箭不と左の左(ナ)左(ナ)左(ナ)左(ナ)
何とて左の左にハまうると左(ナ)左(ナ)左(ナ)

一弓のせんとて、午後をと書之是本字之梅檀巻と書
ハ(召)梅檀(木名)セヘタヒテ、十文字を左とゆく、午後
午後をとて午後之十文字と、午後をとて左と
午後をとて梅檀巻と書てその後これとむく
き後之古物名とゆふむ(ト)キ義理ハ無くとも
或説三梅檀ハ
二葉ヨリロウ
ハキトスアリ
ヤシキハニ
葉ホニラキタ
セト云又ウ
トハスト本ハツ
トニ所アレニ
ラヘニ梅檀巻トエトノ足ノシ取用ニクニラヌ

ハズ
スカブテカブテ着
午夜卷 日帰卷

ウラ
ホビ

二

內外ノ方

未
3

外竹ノ方

卷之三十一

カブラ差ト云ふをす、之の方ト云ふを「物の相」ト云ひ
も、すの相を「内」ト云ふ。日精を月精をト云ハリ六陽之
内、陽之陰之ノア名ヲリ。物之ト云又下ハ陰也。陰之陰之ノア名ヲ
月精卷ヒテ、日精差強差又、上ナ差ト見あざキ。五、七、九、十一、十三
齊ニナリ。ミテナリ。月精之名、名也。月精之月、月也。月也。月也。月也。
やク、義理ノ事也。とりハ却クあり。之く義理ノたやす。會を以テ
ナリ。ナリ。満氣のノ、既ハ既近代の仰くすや。矣。

の事、のきりの上の房を射はば矢三ミ出れ。筋矢スルイの房と云。墓目
まほの房、ふきの下の房と是。公室の大追タマツわふと、墓目ミテ村シマく
墓目ミテ、沙土サトウから白シロうと、かき下ハシめ下シモと、沙土サトウからとをもすか、落ハラフ
力ヒキのまきと云々。又言墓目ミテ人ヒトと村シマとすすむとあり。草
陣アリ者ハセ墓目ミテ人ヒトと射アサフす者ハセ也ス。

一年空スル矣ハシマツと云ゆ。也ハ神主ミツコの如シカクナゾノうてちふもけず
と云ハシマツおぞけハシマツきよ窓ハシマツくぬハシマツ。今ハシマツのせハシマツ年羅ハシマツ歎
と云ハシマツめハシマツ。又云ハシマツやハシマツあげハシマツきよ此ハシマツ石材シマツとハシマツすして
空ハシマツくハシマツ。大年記卷十五正月廿日云々。云々。云々。御飯殿ハシマツ乃因
帳ハシマツのは奢ハシマツ。全村ハシマツとニ塚名卷ハシマツの通稱ハシマツ。鎧ハシマツの上ハシマツ大荒
日ハシマツ鐘ハシマツと云ハシマツ。佐ハシマツをみて佐ハシマツお長刀ハシマツの志ハシマツ。ハシマツて菖蒲形ハシマツ
て菖蒲校ハシマツ。笠ハシマツの太ハシマツサハ云々。考ハシマツの人の墓目ハシマツがよひづれハシマツ。

三年竹とおひりと押削と長弓の鎌の刃分鑿と程多と
筈車と中心をキ通一ヤトキがすけ当巻の上の琴乃
糸と今和紙とおもて紙と世守と木と森のからよ直し
る一弓とちどむねす是が弓箭とせんとくとく江岸
の面と二王亭と亭名ありハ之年三井寺の合戦
の張布が五代と取扱ひてはまされめ鉄陸のす因縁
全村と失我とく中中の人にば先づ進セリ
せむさむく後後と云々小豆矢と而抜ひて標の小
弓とお安とぞ突くうりはま得可とちの珍よ三子
久経武多のせんとくのねり後の後角の金わと裏

表二重と通て表二重斗ひてひづきと兵帽と
表二重と通て死すりと中裏
突の因縁と名むる

一巻目中獸と射取すとあひ東鑑卷三十四仁治二年九月廿四日
左親衛自藍澤被歸數日踏山野獲猪鹿多獲之
其中既一者親衛以引目射取之為先代未聞珍事之
由諸人一同感申て猛牛獣と一目と射殺すと畢
力の甚強きが引目の中骨碎け死一ノ矢ア
かすにて馬上の人と射落とし因ク力強キア
一百矢と云ふ事と云ひ是れもこの事と百番左家

居候よとて侍者肩よりタマ取
山攻め百弓羽矢を手にしたるの十日余三つをけりと
百矢の中より下云前めつて弓は至るをこそ又因多百矢
ニ腰ヒダれよとくと何ニ二腰ヒダト云ハ筋ニ腰ヒダのすゑ多
えよせくと云ハ筋有りと云ハゆきま

一野矢征矢の事既前記東鑑卷三十二童野箭候
御輿右童征箭候御輿方又曰卷三字四官老帶野矢
若輩為征矢ニテ也才差別也征矢逆頬假黒准之弓
少盛野矢八狩能假筋繩少成弓肩一弓之筋也
野矢征矢也者乎也

八日鑄矢事日本記神代卷リタレハ日鑄矢の篇
矣の日と八日はけあるるをくわえり非多ノト神
通事よね多キ、すと改ハトミハ百萬神大八則
八金桓八金主八年代八岐大蛇、十白人尋鷹らとの故
皆殺多キ、すと八と是、うごてハツコウギル、ヨシムズ人
乃殺、時一ノ後、ナニと降ナ、ハ之時モアラニテアク
窮リ有キ、心死れ限ル、アラカニキ、モ御事ヲ詔ハ
ハシミハ日鑄、日のねうきてハア、ヨハズ、薦
目とシタク、ほけたるをシテ、アラカニム
大物のうちもヒヤキアリとぞ、アラカニ白胡の糸糊と云

白友の粉と申され、つづいて虫をもぐる事で
白友族のものと號す。草店にて求む。一匹
一匹枝葉的傷る博主の間取打事。弓馬在室。
弓林にうちてね間はうの事。さうがまく秋石が
てか竹とよる。下は弓馬を定む。方より
下からまよひ。ちりりとほんをすの方とよ
りてす。又は重ねてうちて弓馬を打事。いそ
うそす。一定是弓馬の又は麿射の箭。弓馬を
そそぎて。時々うちておる。りびと。但し弓馬
とおの羽根。射方の羽根。時々うちておる。と
おの羽根。

「ちやく可おれどちは畢竟へ又多くへるらう
おは右のよもじにけて強とりてたゆどら
は摩て倒れす」お時が竹之あそび
弓矢お時も竹矢が下ス又筆画之花ハナをもん
「ちやくお時の竹カキとす」又素素長毛筆シラヒ
杖ハシマとサ財サシと萬玉ミツタケと一イチばかり腰ウエスト
れてす」

一ノ矢森室町にち候事す湯本御用掛
北高
至らるる森軍陣の
御代候守候わよまくもれと云ふ事なり白地白地
身、白馬也といひたまへえ事あつせ事やば主事あふ

まく御草かと名はゆれば事とする夜をそぞる
水草草やれ又一内書一うち御草と云ふ者も
無くあくち頭の廣し植せぬゆ。儀とけ事うゆ
てゆどもまの近とひへば内穿するまゆ
無塵りとすむがどくする矣。下らの不形ハヤト
一雁股乃事。雁の股は併々事也。ケラレハシ
カヘル中墨アヒトソヌ。ウラヤ中墨アヒトモウラハシ
アリナリ。シテカリト。シテカリト。シテカリト。
アリナリ。シテカリト。シテカリト。シテカリト。
アリナリ。シテカリト。シテカリト。シテカリト。
アリナリ。シテカリト。シテカリト。シテカリト。
アリナリ。シテカリト。シテカリト。シテカリト。
アリナリ。シテカリト。シテカリト。シテカリト。

を文字と書くよ、ばか外文字あるも、ううう
永正家中
射矢ト見
上ナリの矢ニテハ箭ハクニキ、を上ナシズミニ
ナトハ別ノトナシ箭ニ正面上ナセシ、仕事モタリ、時ヨアシヤ
ナリアレヌ
不可、たゞ弓ヨリ不見ミテ、弓ナリ也

厚幸盛衰記
卷十九　ね夜
かやのゆよすゆ（中）
あゆくう矢羽里の京
御内人道等
名ふれ川内、お野の羽衣、山名の尾こりしれもの内しき

ノ中身のサヤアリテ、アハラタケナメトウリテ
斗ふす大めウツキ、すげ仕事の事はほくちやうされ
えうむみ羽とて、いざひどいるゝが、トソレのキア
もすもすとキテヤフ、アラタコトウラキアヒルミ
今せの人キヤテ、ヒヅアミタキモトスモを知ズ、ト
うち極とナする事アリトモ、ひ体ハ矣のよと、モヒ又キ
中ヤアシト、上ヤアシト、計りムシテ仕事する事アリテ
何事アリヤキナリ用、タナキナリ義経の文を往
考、アリテ、アリシモ、アリノ所ト地と食ひ、食た
のみの羽と、アリノ羽と、アリノ明と、アリノ黒と

般矢升格圖

弓は筆書ニ廿五年、時
ナラテハ上サニヤスノイ
ロタリ中サニモ上サニ
サス時、サスカラス

四、外向也

前向ト羽内向ト矢ヲ云前陣
足所ハ内向矢ヲサスセ外向ト
足所ハ外向矢ヲサスセ是ニテ
カリ古々中ハ内向外向足ノス

內向，事之

すまの肉かわく行けりと室へ行の陽の代より
又又ねどつるぐ縄すらす又細くさまで筋織み
うそくらよ巻く右の筋筋ほせもまき細くさまで巻
か左巻よ直擣カタハラと巻くと云六筋と少くとも三
擣ヨリナシと云ふ是ヨリナシ四シテ二ニ一イは
擣と多くと云ふすまは筋筋と巻くると直擣と巻と云
筋を巻き少くと少くとも三擣と云ふと云ふは
筋れぬかす直擣と云ふこよ擣レ云ふ
うけいもとさすす夏秋かくはくとすさす春冬かく
ますとくとまどがのと春みとすすめ秋とすすめ
うすとくとまどがのと春みとすすめ秋とすすめ

眞理作
サザンサル
負丈云佛、男ニ尊ミサツリト、男ニ有ラズ又ニ婦人
ノ行ニシテ、不穢ウテ、修ムアヌマニ時、律ニ一持中ノ事
事ニ婦人ニ役トナリ、又伊勢ノ神ニカクノモ院
、天子佛女有リ、社ニ巫女御奉事ト奉ル、ヨリ男ハ陽之
女也、陰陽、天地自然ニモアリテ、万物生テ、天地ニ通ス
ケズ、俗ニ神道、寺ハ、婦人モモレニ事ナリ、乃、修ムの
律ノ間ニ、佛ト名セ、了ニ、女人禁制トスル、佛は
シテ、多ニ有ル、聲、聲ニトサヌ、内ニ有ル事、何ニ
アリキト、修ムの事ハ、意も、下軍也、キモシムト
左の跡を今准メ

一聲と手と云ふは亦、さうにぐるを以てつぐと云ふを略
します。左様と考へて七つぶの長つ幸の平
あゆは、惟純の角、めの名前より、子孫の玉乗うち
角川の御子のうちの延喜をして、左様玉伊村内
耳もとくふえり

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

中京、之はうの國、留連す。従事するもの有り、
事に就て、今世にまづ、之を以て、私物とぞ爲る。

乃事へさうでまゝ、割土ともて作るより裁ふれの事ねり
之古根の御用集事室坐て文字を出でサイテと割を仕て後
撰和歌集卷七秋の音かよニモミタヒツコキヤシテとある
もとよけり

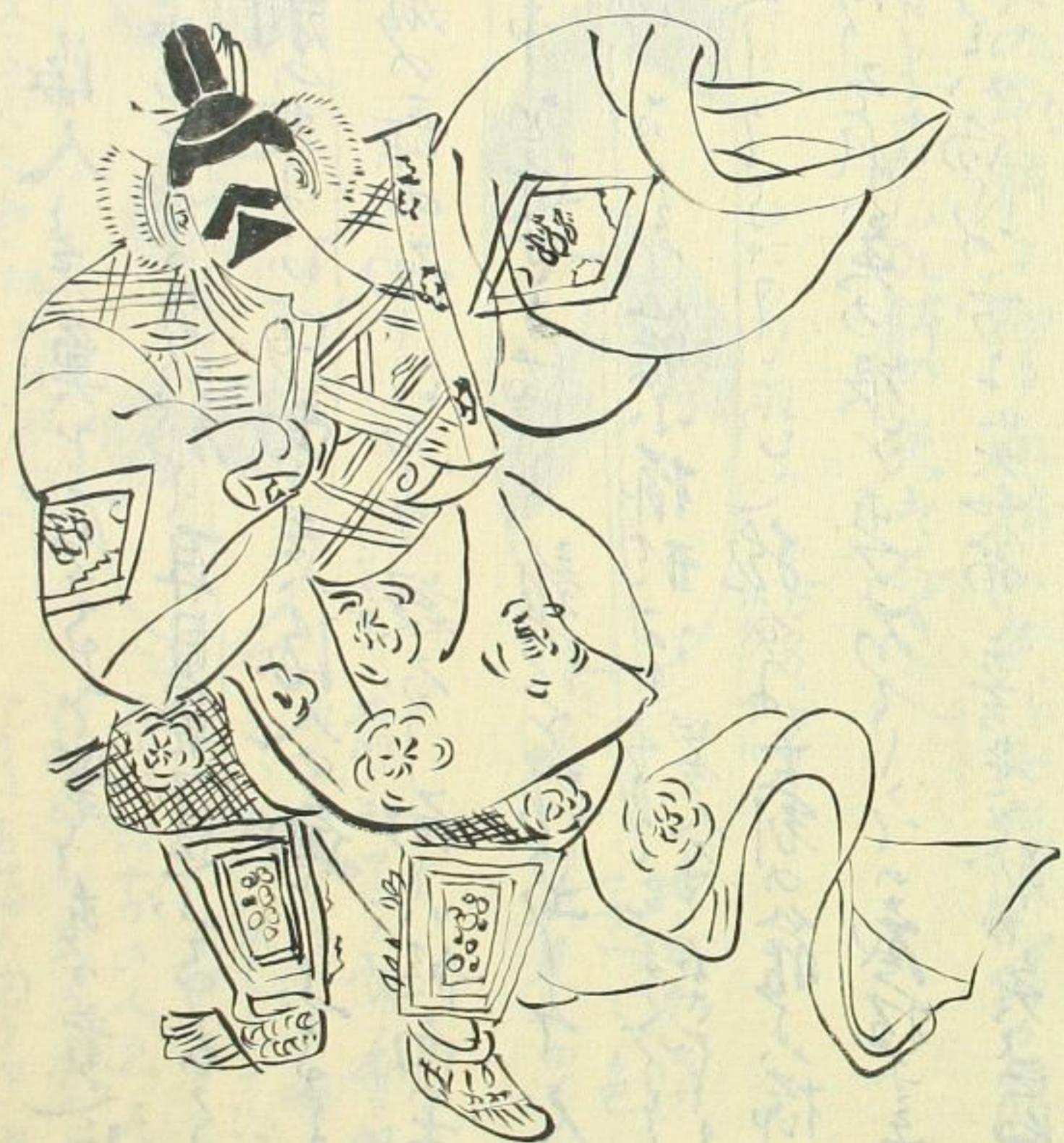
君の後を以て神と秋の行幸を乞ひまわ
徳を納む枕草子に記す。かくの如き方あ
ひもあひまつてうそをいふが爲めに之を割るのと
くまのうすにむかへと云ふ

一あほよもよき羽の事、真羽の中よせああ、高羽だ
舞よえされば、あ風人のああぬの、おもてりまく海人の

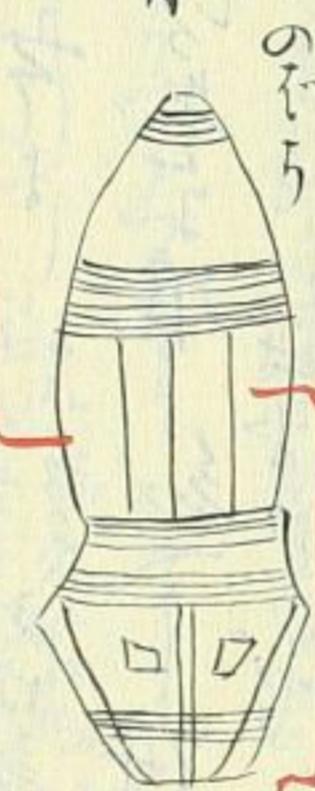
太平記篇
唐通事
海人面
集部手稿
貞子トアリ

耳口頭飛ふとと画うハ安麻乃舞御
安麻乃舞御を舞の面御
安の形と書いて
御立て、舞すあまの面御と云、安麻の舞の面
明了(面)ニシテ
やばの文ゆ、と云ひ^{アシテ}トコトは
絵圖アシテモアリ、くとてうけ、右のこゝくらの面
文ハ、くとて、ねみとつす右の絵す相量の絵
ひじるが、ひき、考るに傳へ左は安麻の舞の
馬をうは、主くるに傳へるも、あひあひするも
トコト
舞の面アシテトコト

安麻乃舞



安麻乃舞



ちむ、大竹をさうてあらをさせられまつたま

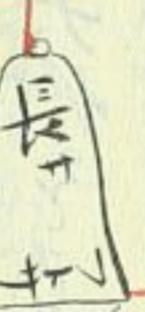
卷之三

乃此名ハ「臂」の
毛と「手筋」とす
る事の意也

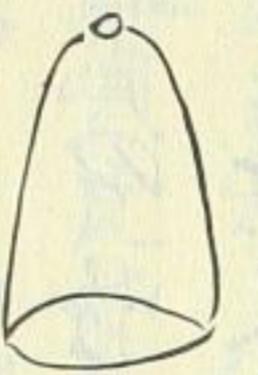
定本

13

卷之三



卷之三



行
根
目



行
根
目

古代は墓目字と云ふ職人をして墓目口をすくう。今
まことに其の職人を云ふ。而して中をくりて後をひきや
壁を引いて、土をハモリ、あらわの下をつまへうがとも、こ
そ云ふ事ある。よれいのとのこと。また必ず
之を今まくせしめのうやうとしきの形
と称す。りうち
めいじら
めいじらは、引目の下にさくらぎある所をめいじひよ今この行と重く
いふ。入てうすくけやうといふ。向もむす
一竹根墓目、やまとき竹の根のさきの丸く、もううみかづり
不そちひく。根二つまで墓目一つ



行
根
目



行
根
目

カクホリ入へし是石例ヤ又角ヲ目柱に入ルハケナケ安シ竹ノヨリニテ
柱タヌクルナリ

右の墨、天文元年三月、笠原民部太輔長棟の写せし羽後の中より、すず巻川氏りて宣せし。か未よろすは
多、かキ、足ト、かキの白疋よハかくとくす中の文も、
是小、似テ、左ノアミのやまとと之

竹肉シテテ浮キタルヲニカリ堅キ筈ビ肉シテリテ堅ニウキスハ肉ニラヌユ
淳ストニナリ水ニムリノニハアラス何ノ筈ニモ水ニムクナリ信州諏訪人ノエク
信州ハスゲテ竹ヲ性惡シ大キ竹ナトハナシトニ核スルニ寒國ナルヘ士地竹ニ相應
セサルス竹ノ肉實セスシテウキスニナルナルベシ

一
ゆけのゆきくわい、かしのすを元み跡記ス

一
矢のあげ節^ノ村つけの節^ノ的^ノ矢^ノ弓^ノ之^ノ

一
たのちよし^ノ之^ノす引^シれ^シ祕^シは書^フ

一
村^ノ事^ノ多^シ之^ノちれ祕^シ傳^シ書^フ畠^ノ傳^シ事^ノ也^シ村^ノ事^ノ多^シ之^ノ翁^ノ翁^ノ也^シも^シく^シち^レつ^シひ^シと^シ是^ノ多^シ之^ノ翁^ノ翁^ノ也^シする
不^シ入^シ六^シ食^シハ^シ年^ノの^シむ^シ十^シ生^シより^シ余^シテ^シ之^ノ翁^ノ翁^ノ也^シ
之^シハ^シま^シも^シ之^シ翁^ノ翁^ノ也^シ中^シより^シ村^ノ事^ノ多^シ之^シ翁^ノ翁^ノ也^シ
の^シや^シと^シて^シ之^シ翁^ノ翁^ノ也^シ之^シ翁^ノ翁^ノ也^シ

一竹林漁書立算行ハ二年行シテ三月既ニ三月と併算ト
ニ二年よたゞさと云う事ナリトシトビドリタマテハア
久毛近年の立算行シテ此ノ腰ア居テアラ遠多竹
育生シテ來年既ニ月ねハ一年よて二年行セ今
年のみ育生シテ竹を年、月やうとけうす
今年の立算行シテ竹を三年めの八月やうとけ
きすと今年の立算行シテ竹を四年めの八月やうとけ
三年行の立算行シテ竹を四年めの八月やうとけ
一チ年よて西めにわすと様と云々四行シテ
一差筋引後和書立算行シテクレ管子立算行

般と云ひやうて般を而て見えキヤー元
じいと云ハ被り算のめくテアリヨリア
ぬどひすとハ莫くきらやうとくたる
一草筋射御拾送候ニテ此草筋ひるハ略儀也
あら方様御成次第云般は原ひ腰行アサリ
いひもひ、キモヒ、クモヒ等と云六筋行アサリ
トモ近るゝさうつ筋と云ハ井のはとくらあ
足もも草筋と云六筋の方をもるめには
モリ、モリ

諸事専用紙にて
長サ四寸ありと云々

長サ四寸有リヒミナ

某岩石蠅頭の子、本間流す。秀吉角鶴の羽と先白
くふくくひやよゑへーとともえやくえとゑあゝ又
白をとちりひやゝ羽、たゞと、某岩石をえ又
うちをのこして羽、たゞと蠅頭をうち

一 三ツ愈四ツ愈 やうけの事 留川玄旨弓馬す書 慶長八年
ニ記サレ先也
弓ケ皮
卷フスヘ シカツテ
云 やうけと四ツげみ 刑事 射のわらぬ所より又
ナサニエテシルトナシトニテ
卷水ギ
紐繫指
之高指
クヌシ指
力 オウシ堅クナリタ松差矢始リシ後ノト見エ
ヲカラサキ 皮ニテツクノ故ハ不守軍陣卷フスヘ望ミ峰立リ效ラ付ル略儀ハ名革ノシナヒス
革無文ノミモ反皮ニ無文ト云ハ無地ニヨミ反皮ニムラサキラニモコツクニ用ユルトニハ、アニヤウラソク
為ニ用エルトニ

一せんたる卷せんたる卷二部の事せんたる事、すまむに
す如くおげあらの弓の本筋、末筋のつよ筋とありて
十文字のまくとせんぎくをとつあら、せんたるを
とみ、おげあらの弓筋とせんぎくをとつあらの弓筋と
とすりつけ卷圓分おげく卷又分わきて又二分
せんぎくをとつあらの弓筋とせんぎくをとつあらの弓筋と
おとだんじは四角の弓字半弓、曲弓を弓の弓筋と
直上直下をすすみ三折より直角をつくる

せんた巻ア弓弓矢ハ千年巻アリ下地ヨリノ一ノ年
麻糸ヲテ巻目立カシギクタヌ又カ分

卷たんくめは麻手て奉手せようとて陰
あやとそろそろめぐらし板下毛根手とお
白鳥とつる鷹脚ひきとすすり足をせしを
乃ちと云ふ

一そそ重の弓と云ふ永正家守竹馬記と云ふ事
弓をいめて弓をあへて弓をハメテナリと云
本と云ふ事くめの弓上弓矢ノシテ白鳥

一重赤朧カツラの弓と云ふ圖書文に赤うさー本と云
西うさー弓うさーをいへん赤うさーうさーをいへん
をいへん赤うさー弓うさー本うさーすき有うさーも

ゆて矢あく多手三手よ白鳥とつるを赤
うさーと小際手とませずめうさー
一赤うさん弓だらうるるる圖書文宣慈子はうさー
五うさー但のほめく乃はるい金めく又多那
弓ハ荒鷹のほハ人手傳て斜弓アーチ弓數五
又モセイハ弓アーチ弓アーチ弓アーチ弓アーチ弓
赤羽具弓とて各セイヨウスミー付赤京傳則
本赤モセイセイモセイモセイモセイモセイモセイ
一矢アーチ弓とて弓うさー小京傳則元長物傳行
き赤モセイモセイモセイモセイモセイモセイモセイ

すくて包みたる之亦いさせへど、織らる事乃是
今のもくせんの事すとあくろせんの段落は見え
ふくて、平人へもひらめの事えられども空氣
寧ろ公卿へもすや是ハヨモトノ所に乃も用ひて
式の例ハありり、一あらば

一 宮宿のキヤツカヅチとミヤアヒルノア殿と通す
せハムカヨリカヨリカヨリカヨリカヨリカヨリカヨリ
遠ニ持て以テアシカヨリカヨリカヨリ

或說至乃士乃木彌ハク作
琴弾、京八塙リ出ルテ云トアレハ松坂、鶴千用ニシ

トテハ布勢ノ海蔵中射水郡ニ在多胡海氏云此計之名產也
トテハ伊勢國トテ所名立產也

一弦を以てす日五十年也。八十歳余宝永元年八十歳也乃老人の歌
立草を總草よりくろみをうせめくみ風す小よ所けよ
アリとうけて深處アリとしきるしニモアリたるゝ神アリとひき
草アリ生羽アリの山形アリいふうもアリと立草アリはくして神アリ
一矢用アリる鷹アリ鷹アリ木氣墨アリ鼠アリのすひをアリ
ハモアリうどくアリ之アリとくアリうちやうまアリきねアリすます尾アリ
細アリすこもさびアリがすまのすアリ射アリ御アリおと心アリもさび

鶴
字八
説入

ハニシトミタハ漫遊もまびの字すと曰ふ
一鶴目梓之了東鑑達父元年九月十八日徳保野矣郎
賢之無文淳羽以鶴目梓梓之方口巻セ又捲川敦元
ウ記モ一羽形と云書テルノメ板書モク御多之
又立あらゆるめのくじきとくそ直筆モ前て行
入の事例もくとくいふ乃様と云

